
バレンタインに心を込めて

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインに心を込めて

【Nコード】

N3400A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

中流大学二回生の成川茂人^{なるかわしげと}は、自分では全く自覚がないがかなりのナルシスト。影ではナルシーと呼ばれている。茂人は自分に彼女ができないことを不思議に思っていた。そんなある日、同じ大学に通う一つ年下の本城美子^{ほんじょうよしこ}と運命的な出会いをする。美子は名前とは裏腹の容姿をしていた……

プロローグ（前書き）

京享さんのヒントを元に書いてみました。上手く書けるかどうか分かりませんが、完結目指し頑張ります！どうもありがとうございます。

プロローグ

顔と性格どっちが大事？

って聞かれたら、大抵の人は「性格」って答えると思う。滅茶苦茶悪い性格の人間よりは、顔が醜くても性格の良い「性格美女（美男）」を選ぶんじゃないかと思う。美男美女は三日で飽きるけど、醜い顔には三日で慣れるっていうし……。

けど、「性格」はどちらも普通で、顔が良い子悪い子の二人が並んでいたら、絶対みんな顔の良い方を選ぶと思う。これ、当然だね。

その点、俺、なるかわしげと成川茂人は、顔も性格も良い理想的な男だ。俺のと名前を文字って『ナルシー』なんて呼ぶ奴もいるが、俺は決してナルシストなんかじゃない。本当のことを言っただけだ。

なのに、何故か大学二回生になった現在でも、彼女がいない。今まで女の子と付き合ったことさえない。信じられない……。俺はジャーズの 似のイケメンだ。いや、より上をいつてるかもしれない。こんないい男に、世の女達は何故気付かない？

不思議だ。このことは、未だに理解できない俺にとっての七不思議の一つだと思う。

第1話 ああ、勘違い

二十歳の茂人は、中流大学の経済学部二回生。電車で片道30分の道のりを、自宅から通っている。欠講することもなく、毎日真面目に通っていた。

サークルにも入っていない、バイトもしていない、彼女がいないばかりか友達さえいない茂人にとって、学校に行くこと以外何もすることがなかった。大学に入学した理由も、もっと勉強したいことがあるとか、将来のことを考えてとかいう目的があった訳ではない。ただ、まだ就職する自信がなかったからというのが本当のところだ。とりあえず大学に入ろうということで、自分のレベルに合った大学に入った。先のことなど何にも考えていない。

しかし、茂人はいつも思っている。『俺ってなんて真面目なんだろう。大学一の優秀な学生だ。顔と性格がいいばかりではなく、頭までいいんだなあ……』と。本当は、試験ではいつも追試を受けるギリギリの線なのだが。

今朝も茂人は朝の七時に起きて、ゆつくりと朝食を摂っていた。一時限目の講義は9時からなので、八時過ぎの電車に乗れば余裕で間に合う。苺ジャムをたっぷりぬったトーストにかぶりつき、口をモグモグさせていると、ドタバタと階段を駆け下りてくる足音がした。

「わあ、やばい！ 朝飯食ってる暇ねえよ！」

高校二年生の弟、健人けんこが台所の掛け時計を見て叫ぶ。

「もっと早く起きろ」

茂人は横目で健人を見て呟く。

「兄貴と違って俺は夜遅くまでバイトしてるからな。その上に勉強やデートで忙しいんだよ」

健人はそう言い、テーブルの上の紙パックの牛乳を掴むとそのままゴクゴクと飲んだ。

「おい、コップに入れて飲め！」

「じゃ、行って来ます！」

茂人の言うことは無視し、健人は手で口を拭うとそのまま慌てて家を出て行った。

「チッ、あいつはいつもラッパ飲みしやがる……行儀悪いよな。その上、態度もでかい。弟のくせに……」

なんで、あんな奴に彼女が何人もいるわけ？そのことも茂人には不思議なことの一つだった。健人は小学生の頃から女の子にモテて女友達がたくさんいた。中学生の時にはもう彼女がいた。しかも、茂人が知っている限り三人の女の子と付き合っていたようだ。高校生になった今も、複数の女の子と付き合っている。

「信じられん……俺の方が断然カッコイイのに」

茂人はいつも持ち歩いているコンパクトを取りだし、自分の顔を映しだしてみる。

きつと、俺が長男だからだ。長男ってなんとなく女の子に嫌われるんだよなあ……茂人はそう考え、軽いため息を吐く。今時、長男だからといって付き合っのをやめる女の子がいるのか？というツツコミを入れる人間はその場にはいなかった。

茂人は朝食を食べ終わると、食器を洗って乾燥機にかけ、牛乳やジャムは冷蔵庫にしまい、テーブルの上を拭いた。両親はとくに仕事に出かけているので、いつも一番最後に家を出るのは茂人だった。それで、食事の後かたづけは茂人の仕事となる。時々、洗濯物を干し忘れた母親の代わりに洗濯物を干すこともある。ブツブツ文句を言いながら家事をこなす茂人だが、案外家事が嫌いではない。スーパのチラシをチェックして、学校の帰りに買い物をすることもある。冷蔵庫にある在庫品は、母親より良く知っている。

洗濯物の取り入れも、一番早く帰って来る茂人の役目だし、時々アイロンがけや取れかけたボタンを縫いつけたりもしている。

ああ、やっぱり長男って損だよなあ……好きでやっているということに気付かない茂人は、物思いに耽りながら玄関のドアに鍵をかけ家を出る。あつ、でも、こうして憂いを帯びた顔で考え事をしてる俺って、かなりカッコイイかも。茂人は一人でニンマリと笑う。茂人は気持ちの切替も早かった。

こうしていつものように、茂人の一日は始まる。

第1話 ああ、勘違い（後書き）

プロローグとエピソードは一人称、他は三人称で書いていこうと思います。

茂人はこういう人間なのです。温かく見守ってやって下さい。（
^ ; ^）

第2話 ミス・キャンパス

大学に到着した茂人は、そのまま一時限目の『経済学史』の講義を受けに、201号室に移動した。201号室は大きな教室で受講する学生の数も多い。百人近い数になるかもしれない。

前の方の席を確保しなきゃな。後の方の席に座ると、喋ったりふざけ合ったりする奴が多くて教授の話が聞こえない。中には講義の最初から最後まで携帯で話たり、メールしたりしてる奴もいる……全く、不真面目な奴らだ。

俺なんか、講義の前にはちゃんと携帯をマナーモードにしてる。それがエチケツトつてもんだ。少しは俺を見習って欲しいよな。

茂人は、滅多に鳴ることのない携帯電話をマナーモードに切り替える。茂人の携帯が鳴るとしたら、家族からの連絡の電話かメールのみだった。大抵母親からのメールで『帰りにスーパーへ寄ってを買って来て』というのが多い。

「おはよう！」

茂人が教室に入ろうとした時、横から明るい声がした。

「あつ……お、おはよ」

茂人はうわずった声で、辛うじて挨拶する。同じクラスの篠原百合^{ゆりか}だ。彼女は去年大学の『ミス・キャンパス』に選ばれた、とびきりの美女だ。容姿が良いばかりではなく、成績も性格もかなり良い。美人であることを鼻にかけることもなく、気さくで親切。異性ばかりか同性にも人気がある。その上に医者^{しほ}の娘というだけあって、生活も裕福そうだ。

天は二物を与えずって言うけど、彼女の場合三物も四物も与えられている。

俺の彼女になれば、まさに理想のカップル間違いなしだ！

百合香の笑みを受けながら、茂人はニヤリと笑う。

結構、シャイなのかな？俺に気があるなら、早く告白してくれりやいいのに。あつ、もしかして、もうすぐ来るバレンタイン・デイを待っているのか？その日を待って、俺に打ち明けるつもりなのかもしれない……

そんな事を想像して、茂人の頬はほんのりと染まる。

「百合香、おはよ！」

向かい合っていた二人の後から、百合香の友達達がやって来た。

彼女達は怪訝な顔をして茂人に目をやる。

チツ、邪魔が入ったか、せつかくの二人だけの世界を……。茂人は吐息を漏らすと、女性達の冷たい視線を浴びつつ教室へと入って行った。

「百合香、ナルシーに気やすく声かけない方がいいよ。あいつ勘違いしそうだから」

百合香の友達達は、茂人の後ろ姿を冷ややかに見つめる。

「勘違い？ 私、ただ挨拶しただけよ」

「だから、それが勘違いの元だって。あいつ何かストーカーとかしそうなタイプじゃん」

「そうそう、あいつと同じ高校だった子が言ってた。いつも一人で鏡覗いてにやけてるんだって。なんか、自分のことイケメンだって信じてるんだとか……」

「ゲツ、キモイ……かなり、お目出度い奴よね」

「百合香、気をつけなさいよ」

「そうなの？ 成川君、未だに友達いないみたいだから、なんとなく可愛そうかと思って」

百合香はキョトンとした顔で、一人席に着く茂人の方を見る。

「いいの、いいの、ほっときなさい」

女性達のヒソヒソ話など耳に届かない茂人は、今日も教室の最前列の席に陣取り、クールで孤独な美青年になりきっていた。

第3話 出会いは突然に

午前中の授業を終えて、茂人は一人学食へと向かった。

ここの学食のメニューはなかなかいける。そこいらのファミレスより断然美味しいし、とにかく安い。雰囲気も良く、高級レストラン並にくつろげる。片隅にはグランドピアノが置いてあり、たまにピアノが弾ける学生が演奏していたりする。この大学で一番自慢出来る場所は、学生食堂かもしれない。

そんな訳で、広い食堂はすぐに学生達で満杯になっていた。行き遅れるともう席はない。食べ終えても皆なかなか席を立たないから、出遅れた学生は近所のコンビニまで走って行かなきゃなくなる。そんなのごめんだ。コンビニに買いに行くくらいなら、自分で弁当を作ってくる。

茂人はそう思いつつ、学食へと急ぎ足で進んだ。

「なっ、成川君！」

ふと、茂人の背後で不気味な声がした。背中にゾゾツと悪寒が走る。

ゲゲゲ……また彼奴だ。茂人は小走りで先を急ぐ。

「ナ、ナルシー待って！」

声の主も足を速めて追いかけてくる。

ナルシーだと？彼奴にだけは言われたくねえや！美青年っていうのは、同性にもモテるもんだが、彼奴は許さん！

茂人は逃げ続けたが、学食の食券売り場で追いつかれてしまった。自販機の食券を買わなければ、食べることは出来ない。自販機の前は既にたくさんの学生達が並んでいた。

茂人は仕方なく立ち止まって列に並ぶ。

「やっと追いついた！ 成川君、走るの速いなあ」

はあはあと肩で息をしながら、彼はヘラヘラと笑う。

同じクラスの鈴村直樹すずむらなoki。分厚い眼鏡をかけた小柄でずんぐりとし

た男。いつもリュックを背負い、大きな紙袋を携帯していた。いわゆる、アニメオタクの秋葉系男だ。直樹は何故か一回生の頃から、茂人に付きまとう。自称『茂人の親友』なのだった。

直樹に言わせると「成川君は僕と同じ匂いがする」らしい。初めて会った時から、「ピンとキター！」と言っている。また、「僕と成川君とは、赤い糸で結ばれていたんだよ」とか、マジな顔で言い切る。

勘弁しろ。酔ってもないのに吐き気がする……。

しかし、嫌だと思いつつ茂人は直樹をむげに拒否することはなかった。

俺は根が優しいからな。ボランティアで友達のフリをしてやるか、と思ったりする。だが、深入りはごめんだ。

「な、成川君、帰りに付き合ってよ。今日、新作ソフトの発売日だったんだよ。本当は、休んで昨日の夜から並びたかったんだけどねえ」

直樹は一人で喋り始める。茂人は直樹を無視しつつ、食券のメニューに目をやる。

何にしようかな？……今日はカツカレー定食にしようか？あのポテトサラダすっげえ上手いんだよなあ。今度こっそり作り方教えてもらおうか。

茂人は一緒に添えられている『ポテトサラダ』を食べたいがために『カツカレー定食』を選び、自販機のボタンを押した。

「あつ、成川君『カツカレー定食』かあ。僕も同じにしよ！」

後で聞こえる直樹の声を無視して、茂人はカレーコーナーへと急ぐ。学食内は混み始め学生達でごった返していた。

人並みに紛れなんとか直樹をかわし、茂人は『カツカレー定食』をゲットした。直樹と一緒に座すると、ずっと直樹のアニメの話聞かなければなくなる。その手の話を始めると、直樹の話は長くなる。昼休みが終わっても午後の授業が終わっても話をやめないだろつ。誰も注意をしなければ、学食で一晩を明かし翌朝まで喋って

いるかもしれない……。せつかくの静かな午後の一時が台無しだ。茂人はひとまずホツとして、氷をたっぷり入れたコップに水を汲み、トレーに乗せた。そして、なるべく人のいない隅のテーブルを目で探し、トレーを持って移動する。

今日は中庭に面した隅のテーブルが空いてるな……。茂人がそう思いながら、急いで歩いて行こうとした時、何者かが突然茂人の前に飛び出して来た。

ドサツ！ ガチャン！ カラカラカラッ！

一瞬、何が起こったのか分からなかった。何かが茂人にぶつかり、弾みで茂人も後に倒された。

「……………」

気付いた時、茂人の目の前に一人の女が転がっていた。プラスチックのコップがコロコロと床を転がっていく。トレーとスプーンは床に落ちカレー皿は逆さまになって、茂人の腹に乗っかかっていた。「アーツ！」

服がカレーまみれだ。服どころか、腕や顔にもカレー汁が飛び散っていた。茂人が恐る恐るカレー皿をどけると、カツとご飯がグジャグジャになって腹の上に現れた。服を通してカレーライスの熱さが伝わり、全身からカレーの匂いがする。

「……………ごめんなさい……………」

と、蚊の泣くような小さな声がした。カレー皿を掴んだまま茂人が目を向けると、転がっていた女がゆっくりと顔をこちらに向けた。

第4話 見慣れぬ顔

目、細っ……。

茂人は女の目を見て思った。こんな細い目を間近で見るのは初めてだった。それに、低い団子鼻、手入れのされてないゲジゲジ眉毛、厚ぼったい唇。

こんな不細工な顔、初めて見た！ おまけにこの女化粧さえしていない。髪は伸ばし放題にしたのを黒ゴムで一つにくくっている。服も安物のトレーナーにジャケットとよれたジーンズ……。全くの普段着だ。

いいのかこれで？……。

野放しの女の格好を見て、茂人は今の状況のこと忘れ、しばし見入っていた。

「あの……すみませんでした」

女は茂人に向かってお辞儀をすると、近くの床に落ちていた皿を拾った。

「このサラダは大丈夫みたいです」

ポテトサラダが入っていた皿だけは、ひっくり返らずそのまま上手く着地したようだ。皿の中にはこぼれることなく、ポテトサラダが入っている。

女は微笑むと茂人に皿を差し出した。笑うと細い目がもつと細くなつて糸のようになる。待て、このサラダだけ食えっていうのか！？

「いらないよ」

茂人はムツとして女を睨む。

「どうしてですか？ このサラダ床には落ちてません。きれいですよ」

女はなお皿を掲げて茂人に迫る。

「せっかく作っていただいたサラダです。食べないなんてもったい

「ないです！」

「食えるか、そんなの！」

大声を出した拍子に茂人の腹のカレーがダラリと垂れた。

「……」

二人の様子を見ていた学生達から、クスクス笑う声が聞こえる。

茂人は今の自分の置かれた状況に気づき、急に恥ずかしくなった。

「ナルシー！」

転んでいる茂人を発見した直樹が、二人の元に駆け寄って来た。

「うわあ！……こりや大変だ。成川君早く着替えなきゃ。カレー染みはなかなか落ちないよ」

「……着替えなんか持って来てねえよ」

「僕のジャージを貸してあげるよ。昨日体育の授業で使ったのがあるからね」

ゲツ、こいつの着たジャージ！？ 想像するのもおぞましかったが、他に手段はなかった。見せ物のようになっていてこの場からも早く離れたい。

茂人は腹に乗っかっていたカツとカレーとご飯を手でたぐり寄せ、起きあがってトレーの中に入れた。床に転がっている他の皿やコップも拾い集める。女が手に持っていたサラダは無視した。

「サラダ、食べないなら私がもらっていいですか？……」

女が小声でたずねる。

「ああ」

茂人は面倒くさそうに返事をする、汚れた床を拭くため食堂の人に雑巾を貸してもらいに行った。女はホッとしたように、サラダを持って立ち上がった。

「あの……これ、クリーニング代です。受け取ってください」

床を拭く茂人に、女が五千円札とメモ用紙を差し出した。

「もし、お金が足りなかったりシミが落ちなかったら言ってください」

「……」

茂人は黙ってお金とメモを受け取った。

「本当にごめんなさい。……注意して歩いてなかったもので」

女はペコリとお辞儀をし、細い目をもっと細くして微笑んだ。

やむなく直樹のジャージに着替え、午後からの講義を休んで茂人は大学を早退した。汗くさくて小さすぎる直樹のジャージをどうにか着込み、上からカレーの匂いのするジャケットを羽織って、茂人は電車に乗り込んだ。

直樹が持っていた紙袋に汚れたシャツとズボンを入れて持ち帰る。茂人には小さいジャージのズボンは、電車に座ると膝下の方まで上がり素足がもろに出た。耐えきれない屈辱だ。一刻も早く家に帰りたい。たかった。

「……」

ふと、茂人はポケットに入れていた女のメモ用紙を取りだしてみた。そこには女の名前と電話番号が書かれていた。

ほんじょうよしこ
「本城美子……」

美子。美しい子と書いて美子……。茂人は美子の顔を思い浮かべる。あんなにも名前と顔が一致しない人物は未だかつて見たことがない。完全に名前負けしている。性格だけは良さそうだったが、あれで性格さえも悪ければ救いようがないと思う。

ま、いいか。もう会うこともないだろうし。

茂人はメモ用紙を丸めてくしゃくしゃにし、ポケットに突っ込んだ。

第5話 もうすぐバレンタイン

茂人は真つ直ぐ家に帰り、服を着替えて自転車でクリーニング店に直行した。行きつけのクリーニング店は、割引セールをしていていつもより値段が安かった。

美子から貰ったお金で充分足りて、おつりが返ってきた。

カツカレー代を入れたとしてもお金あまるよな……。美子に返した方が良いと思うが、もう一度会いたいとは思わなかった。あの女、俺のタイプじゃないし。電話かけて呼び出して、変に勘違いされても困るんだよなあ……。俺に一目惚れとかされても迷惑だし。

茂人は余計なことを色々考えながら、自転車を飛ばしてそのまま近くのスーパーに走った。今日も母親からのメールで、夕食の材料を頼まれていた。買い物だけではなく、結局茂人が料理も作る事となる。一応嫌な顔はしてみせるものの、茂人は買い物も料理も好きだった。

夕方近くになり、スーパーは主婦を中心とした買い物客で賑わっていた。

茂人は買い物かごを手にとって、店内に入る。割と大きなスーパーで食材は多くなんでも揃っているが、値段はあまり安くなかった。タイムサービスの時間はもうちょつと遅い時間だからなあ。今日の目玉商品は何だろう？ チラシチェックしとけば良かった。

専業主婦より主婦らしい考えをしながら、茂人は野菜売り場へと向かう。

今日はカレーライスとポテトサラダにしよう。お昼に食べ損ねたもんな。……。そう言えばあの女、俺のポテトサラダ食ったんだろうか？……。唯一無事だったポテトサラダのことをふと思い出す。俺も食いたかったなあ。けど、美子とかいうあの女、変な奴だ。直樹に負けないくらい変だ。

茂人は、美子の系のような目を思い出す。どうもさっきから美子

の顔が頭から離れない。美しい子と書いて『美子』かあ……。茂人はブツと吹き出す。珍しい顔だったよな。今夜夢に出てこなきやいけど。

「うわっ、野菜高い……」

茂人は野菜の陳列台を見て、思わず声を出す。レタス一個、三百九十八円！ キヤベツ一個、四百九十八円！……。このところの大雪の影響で野菜はどれも高値だった。

もうちよつと安いスーパー探してみるか……。茂人は渋々レタスをかごの中に入れる。

買い物済ませレジに並んでいると、レジ横に『バレンタイン・デイ』コーナーが出来ていた。各種チョコレートが陳列されている。もうちよつとでバレンタインだもんな。去年、茂人はバレンタインのチョコを一個も貰わなかった。高校生の時は義理チョコというのを何個が貰ったのだが、大学では義理チョコさえもらったことはない。もつとも、茂人は貰ったチョコを義理チョコだとは思っていなかった。

大学生ともなると、チョコを渡すのも色々考えるんだろうなあ。そのまま付き合えば『結婚』ってことになる可能性もあるわけだし俺二十歳、親の許可なしに結婚出来る年だ。茂人はククツと含み笑いする。今年は篠原百合香からチョコももらえるかもしれないな。

茂人は百合香の顔を思い浮かべうつとりとする。

茂人が自転車を走らせて家に戻って来ると、玄関先に弟の健人とガールフレンドが立って楽しそうに喋っていた。ママチャリに買い物袋をつんだ茂人は、横目で二人を見るとキキイとブレーキをかけて自転車を止めた。

「よお、兄貴買い物お疲れ！」

「わあ、スゴイ！ 健人のお兄さんって主婦みたいだね」

ガールフレンドは大きな買い物袋を手に持つ茂人を見て笑う。

「主婦じゃなくて主夫だよ。読み方は一緒だけど」

健人も笑う。茂人は舌打ちしながら、二人を無視し家に入る。

お気楽な弟め！ また別のガールフレンド連れて来やがって。

去年も健人は山のようにバレンタインのチョコを貰っていた。健人がチョコが好きじゃないため、健人のチョコの大半を茂人はいつも食べることとなる。チョコ好きの茂人には嬉しくもあつたが、少しでもだけ惨めな気持ちにもなるのだった。

フン、今年は百合香の手作りチョコをゲットだ！ バレンタインのチョコは量じゃなくて質だ。本命からのチョコ一個貰う方が断然価値があるもんな。百合香はどんなチョコ作ってくれるんだろう？ すっかりチョコを貰えると確信している茂人は、鼻歌交じりに台所へと向かった。

第6話 衝撃の再会

結局、美子に貰ったお金のお釣りは、まだ茂人が持っていた。美子にカツカレーを浴びせられて数日経つが、あれ以来大学では美子の姿を見かけていない。カレーまみれになっていたシャツもジャケツトもズボンも、綺麗になってクリーニング店から戻って来た。お釣りのことは美子に電話をかければ済むことだ。だが、茂人はなかなか電話をかける気にならなかった。

あんな女に電話なんてかけられるか。と茂人は思っていたが、実は茂人は今まで一度も女の子に電話をかけた経験がない。美子だって一応若い女性。『女性』に電話をかける！ と考えただけで緊張して手が震えてしまうのだった。

「そんじゃ、行つて来まゝす！」

今朝も健人は大慌てで朝食を済ませ、あたふたと家を出ていく。後、十分早く起きろつての。健人の後姿を目で追いながら、茂人はゆつくりとモーニングコーヒーをすすする。

「今朝のチラシはと……」

新聞の折り込み広告を片手でチェックする。いつも立ち寄る大型スーパーのカラーチラシ。あの店はダメだ、商品高すぎるもんない。電気店やパチンコ店のチラシをめぐっていくと、一番最後に二色刷の小さなチラシが入っていた。

「なんだこれ？ 『ここに青果店』……！」

茂人は、初めて目にするそのチラシにくぎ付けとなる。

「やつ、安い」

どの品もいつも行く大型スーパーの半額以下だ。しかも、『本日の限りの百円均一セール』を行っている。キャベツ一玉、大根一本、玉ねぎ一袋がオール百円！

「どこ？ どこ？ どこ！」

茂人は食い入るようにチラシを見つめ、店の住所を探す。

「ちよつと遠いなあ……けど、行かないわけにはいかん！」

自転車を必死で漕いでも三十分以上はかかる距離だった。今までチラシが入らなかつたのも遠すぎるせいだろう。だが、茂人の心はもう決まっていた。

「よし！ 今日『にこにこ青果店』に直行だ！」

担当教授が欠席したため、茂人のその日の講義は午前中で終わった。

ラッキー！ 『にこにこ青果店』に早く行けるぞ！ 茂人が喜んで帰ろうとした時、後に嫌な気配を感じた。

「なっ、成川君！」

直樹だ。彼奴の声を耳にすると悪寒が走る。

「この間ありがとう。僕のジャージ洗濯してくれて。柔軟剤仕上げまでしてくれて嬉しかったよ。すごく良い香りがしてた」

直樹はヘラヘラと笑う。柔軟剤仕上げは当然だろ。茂人は無視して足を進める。

「あつ、僕も今日は終わったんだ。一緒に帰ろうよ。良かったら秋葉原まで付き合ってよ」

「ダメだ。俺、これから行くところあるし」

「えっ、どこ？ 僕も一緒に行つていい？」

直樹はしつこくついて来る。

「ダメ！」

「えっ？ なんで、なんで？」

茂人が小走りになると、直樹も小走りになって追いかけてくる。

「もっ、もしかして、デート??」

「は?……ま、まあな」

面倒くさくなつた茂人は適当に答える。

「えっ？ ええ!？」

驚きのあまり立ち止まつた直樹を置いて、茂人は逃げるように走

って行った。

『にこにこ青果店』までの道のりは、予想以上に遠かった。自転車で四十五分も走った後は、さすがに息があがった。

「って、店はどこだ？……」

住宅街らしき細い道に入り込んだ茂人は、辺りをキョロキョロと見回す。しばらくすると、買い物かごにたくさん野菜を詰め込んだ主婦らしき女性が通りかかった。

「あの、『にこにこ青果店』って？……」

「えっ？ あそこよ。にこにこマークの絵が描いてあるでしょ」

主婦は、後を振り向いて指さす。その方角を見ると、普通の家の二階部分に看板が掲げられ、黄色いにこにこマークのイラストと『にこにこ青果店』という文字が読めた。辛うじてそう読めた。看板はだいぶ古くなっていて、色が随分と薄れていたのだ。

「今日は特別安いわよ。早く行かなきゃ売り切れになるからね」

主婦はケラケラを笑いながら去って行く。茂人はダッシュで自転車を店の前まで走らせる。小さい店の割にはお客が多いようだ。キキイとブレーキをかけて自転車を止めると、店の中から店員らしき女が店頭に出てきた。

「いらつしやいませ！」

明るく澄んだ声。茂人は顔を上げて、声の主の方を見た。

「あつ！……」

茂人は思わず絶句する。糸のような目をして満面に笑みをたたえる、看板の『にこにこマーク』そのものの顔。ここ数日、茂人の頭から離れられない顔だ。正確には、離したくても離れないあまりに印象的な顔……。

「あつ……」

そのままの笑顔を崩さず、美子も驚いて茂人を見つめ返した。

第7話 『にこにこ青果店』

「この間は本当に申し訳ありませんでした!」

突然、美子はペコリと九十度頭を下げる。最敬礼のお辞儀だ。

「クリーニング代足りましたか? カレーの染みはおちましたか?」

美子は顔を上げ、心配そうな瞳で茂人を見つめる。……否、目が細すぎて実際には瞳までは分からなかった。

「あ、染みはおちたから……それと、これお釣り」

茂人はポケットから財布を取りだし、クリーニング代の釣りを美子に差し出す。

「いえっ! いいんです。お釣りはとっておいて下さい!」

美子は頭を振り、一步後ずさる。

「けど、クリーニング代安かったから、だいぶあまつたし……」

「結構です! どうか貰ってください。私の責任ですから!」

「いや、でも……」

何もそんなにムキになることでもない気がする。茂人は軽く息を吐く。

「じゃ、これで買うよ野菜」

「そんなにたくさんですか!」

美子は目を丸くしながらも、嬉しそうな顔をする。もちろん、目の細い美子の目は丸くはならない。

「は?……ああ」

ま、いいやどうでも。茂人は自転車を店の前にとめて店に入った。

「どうぞ、新鮮な野菜がたくさんありますから」

美子はまた、にこにこマークの絵のような顔になって、茂人の側に寄って来る。

「何?……君、ここでバイトしてんの?」

美子をうつとうしく思いながらも、茂人は聞いてみる。

「そうですね。ここ、私の家ですから。今、母親が風邪で寝込んで

いるので、フルでバイトしてます」

「ふうん、じゃ、今父さんと二人でやってるんだ？」

茂人はキャベツを籠に入れながら聞く。

「いえ……父は半年前に病気で亡くなりましたので……」

美子が言葉を切り俯く。やば……余計なこと聞いたかな？ 茂人は慌てながらも、二個目のキャベツを籠に入れる。

「……キャベツお一人様一個限りって訳じゃないよな？」

「はあっ、いいえ！ うちは何個買っていただけでも構いません！」

美子はサツと顔を上げ、また笑顔を作る。

「そ、そう……」

茂人は三個目のキャベツを籠に入れる。

「大根や玉ねぎもいかがですか？」

美子が満面の笑みで茂人に迫る。

「あ、ああ」

茂人は勧めにのつて、大根と玉ねぎもそれぞれ二つずつ籠に入れる。……なんか、買いづらいなあ。向こうに行ってくれりやいの……。茂人がそう思い始めた頃、レジに並んだ他の客が美子に声をかけた。

「はい！ 今行きます！」

美子は元気に返事を返すと、レジに走って行った。茂人はホツとする。いくら美子が不細工とは言え、若い女性に付きまとわれた経験のない茂人には、女性と二人でいるということに慣れていなかった。

しばらく店内を見回った後、茂人は籠の中に山のように野菜を詰め込んでレジに向かった。

「ありがとうございます！」

美子はまたペコリとお辞儀をした。

「お会計は結構です。さっきのお釣りで充分足りてますから！」

「そ、そう……」

「段ボールにお入れしますね、袋には入りきらないと思います」

言いながら、美子は次々と段ボールの中に野菜を詰めていった。

「あのさ……今、一人で店の番してる訳？」

手当たり次第バラバラに野菜を詰め込む美子を見ながら茂人が聞いた。あつ、大根はみ出てる……。

「あ、俺が入れるよ」

要領の悪い美子を見かねて茂人が言った。

「あつ、すみません！」

美子は悪びれず、茂人に任せる。

「もうすぐしたら、中学生の孝子と小学生の和彦と浩二が帰ってきますから、一緒に手伝ってもらいます。そしたら私、幼稚園に恵子を迎えに行かなきゃならないんです」

「はあ……」

何人きょうだいがいるんだ？

「じゃ、最近大学行つてないの？」

「ええ、母の風邪が治るまでは休もうと思います」

「ふーん、大変だな」

特に大変だと思った訳でもないが、茂人は適当に返事をする。よし！ バッチリ詰め込めたぞ！ 茂人は色んな種類の野菜を小さな段ボールにキッチリと詰め込んだ。

「じゃ、ありがと」

茂人は段ボールを抱え、店を出ようとする。

「あつ、あの、待つてください！」

美子は慌てて追いかける。

「お名前まだ聞いてませんでした」

「名前？……」

ゲツ、この女俺に惚れたんじゃないだろうか？……。茂人に一抹の不安が走る。

「成川茂人……」

「なるかわしげと」

美子は茂人の名前をリフレインすると、レジに走って行き何かを書き込んでまた戻って来た。

「これ、ポイントカードです！ 今度からこれを持って来て下さい。カードのにこにこマークがいっぱいになったら、五百円引きさせていただきます！」

美子はにこにこ笑顔で、手書きのカードを差し出す。

「……」

カードには三つのにこにこマークが押されていた。……この女、結構商売上手だな。

「箱に入れておきますね。また来て下さい」

両手のふさがった茂人を見て、美子は段ボール箱にカードを差入れ、また深々とお辞儀をした。

「ありがとうございます！」

後で美子の大きな声を聞きながら、茂人は店を出た。自転車の荷台に段ボールを置いて、カードを取り出す。

「……」

さっきのカードの名前欄には、ミミズのような文字で『鳴河繁斗』と書かれてあった。なんだこの名前は！ 茂人は軽く舌打ちする。あの女、わざとらしく名前を書き間違えやがった……。これからまた四十五分間自転車を漕がなきゃいけないかと思うとうんざりしたが、無料で山のような野菜をゲット出来たことは幸運だった。

「にこにこ青果店か……」

また、来てみようかな。茂人はもう一度すり切れた看板を見て、自転車のペダルを踏んだ。

第8話 意外な急接近！

足いてえ……。お昼を食べ終わり、学食から中庭に出た茂人は、太股辺りに筋肉痛を感じた。

昨日、『にこにこ食堂』まで往復九十分自転車で走ったことが堪えたようだ。おまけに帰りは段ボール箱に目一杯野菜を積み込んでいたため、かなりきつかった。

最近運動不足だもんなあ。やばいやばい、二十歳過ぎたら老化は始まるって言うし……。茂人は今までも運動らしい運動はしてこなかった。とてもスポーツマンという柄ではないのだが。

しかし、筋肉痛に苦しみながらも、茂人は新鮮な野菜をたくさん手に入れたことに大満足していた。母親も大喜びで、また買って来なさい、と頼まれたくらいだ。母親の場合は、『新鮮な』野菜というより、『無料』の野菜というのが魅力だったのだと思う。

茂人は良い気分だった。春のような爽やかな今日の天気のように、気持ちがつきりしている。空には太陽が、実際の太陽は眩しすぎてとても直視出来ないが、もし太陽に顔があるなら『にこにこマーク』のような顔だろうと思った。

うわっ……。あの女の顔思い出した。茂人の頭には美子の笑顔が浮かぶ。糸目で団子鼻、下ぶくれの美子の顔。すごく不細工だが、嫌な気分になる顔ではなかった。なんとなく、ホッと出来る顔だった。やば……。あんな顔、俺の趣味じゃねえや。第一、俺とは釣り合わないもんな。茂人は頭の中から美子の顔を追い出した。

俺に釣り合うのは、百合香だ。篠原百合香。

「……！」

茂人は突然立ち止まる。キャンパスの中庭の隅に、その百合香が立っていた。百合香は男子学生と二人で向き合っていた。

「あっ、俺の百合香に！……」

男子学生が百合香の肩に馴れ馴れしく手をかけたのを見て、茂人

は思わず二人の方へ足を進めた。

「……？」

茂人が近寄って来たのに気付き、男子学生は茂人をチラリと見た。茂人は無言で二人の前に立ちつくす。勢いで飛び出してきたのはいいが、どうすればいいのかわからない。

「何か用？」

不機嫌な顔で男子学生は聞く。

「成川君」

百合香は男子学生の手を軽く払うと、少し安堵した表情で茂人に笑顔を向けた。

「何？ 百合香の知り合い？」

百合香だと！？ 呼び捨てとは馴れ馴れしい！ 茂人はムツとして男を見るが、何も言い返せなかった。

「そうよ、クラスが同じなの。良かった、ちょうど成川君に用があったの」

百合香はそう言うのと、茂人の腕に軽く手をかけた。

「えっ！？……」

不意に百合香に触れられ、茂人は暑くもないのに汗ばんでくる。

「向こうに行きましょう」

「あつ！ ちょっと、まだ話終わってないよ。百合香！」

後で男子学生の声がしたが、百合香は構わずグイグイと茂人の手を引いていく。

「あ、あの……」

何？ 何？ この展開どうなってんだ！？ 俺、今、百合香に腕組まれてんだよな！ 茂人は狼狽しながら、あたふたと百合香についていく。

「ごめんなさいね、成川君。付き合わせちゃって」

中庭の木の下まで来て、百合香は茂人の腕を放す。

「いや、その、全然大丈夫だから！」

茂人は出てもない額の汗を拭いながら、笑ってみせる。

「さっきの三年の先輩なの。付き合ってくれてしつこくて……」
百合香はフーツと息を吐く。

「でも、私はその気ないから断ってるんだけど、なかなか分かってもらえないの」

「だ、ダメだよ。しつこいのって……」

「そうよね」

百合香は茂人を見つめて笑う。

「ハハハッ……」

茂人は苦し紛れに笑った。笑うしかなかった。あの憧れの百合香と見つめ合いながら笑う。最高のシチュエーション！なのに体は強ばり、笑顔はひきつる。

こっ、これは当然の成り行きだ……美男美女のベストカップルじゃないか！段々と直樹の喋りに近づいてる自分に狼狽えながらも茂人は平気を装った。

「わわわっ……ミスカンパスと成川君のツーショット！」

木の陰から、直樹はその様子を密かに見ていた。

「き、昨日のデートって、もしかしてミスカンパスと！？……」

直樹は思わず大声を出しそうになり、慌てて自分の口を押さえる。

「……信じられないなあ。成川君は絶対彼女出来ないタイプだと思っただのに……」

見つめ合う二人の姿を眺めながら、直樹は目を丸くして呟いた。

第9話 憧れのツーショット

茂人は夢見心地のまま百合香と残りの昼休みを過ごし、午後からの講義も百合香と一緒に受けた。すれ違う学生達が驚いた様子で二人を振り向くのも、遠くから聞こえるヒソヒソ話も茂人は気にならなかった。というより、舞い上がりすぎて気づきもしなかった。

「今日の講義はこれで終わりなの。成川君は？」

講義終了後、隣りの席の百合香が聞いた。

「え？ あ、俺も……」

黒板の文字を写していた手を止めて、茂人は百合香の方を見る。

今日の講義は一段と頭に入ってこなかった。書き写した文字が外国語のように見える。

「じゃ、一緒に帰らない？」

百合香が笑顔を向ける。そのまま写真に撮りたいくらいの、完璧な笑顔だ。

「あつ、でも、篠原さん、サークルがあるんじゃない？」

確かテニスのサークルに入っていたような……や、そんなのどうでもいいじゃないか、一緒に帰ろうって言ってるんだから。……一緒に！？ 俺と？ 百合香とまた二人きりに！？ 茂人はまた狼狽え始める。

「今日はサークル休みなの」

百合香は落ち着いた表情で答える。

「そ、そう……」

「写し終えるまで待つてるわ」

「……」

茂人は百合香が見守る中、必死で残りの文字を写し始めた。手が震え文字は乱れ、自分でも何を書いたのか分からなくなりつつ、何とか写し終えた。

「帰りましょうか？」

百合香は微笑んで席を立つ。茂人は慌てて教科書とノートを片づけた。

な、なにも慌てることないよな。こうなることは最初から分かってた訳だし。百合香もようやく俺の魅力に気付き始めたただけだ。

心臓をバクバクさせながら、百合香と並んで歩く茂人は、心の中で自分に言い聞かせた。駅に着き、電車に乗る。その間、二人はずっと黙ったままだった。茂人はどう会話を進めていいか分からない。時々、チラリと百合香の方に目をやるが、百合香は顔に笑みを浮かべたまま歩いている。

会話なんかなくていいんだ。俺達は黙っていても心が通じ合っているんだからな。そういう関係なんだ。

茂人は一人で納得し安心する。

「成川君と話したの初めてね」

不意に百合香が口を開いた。

「え？……そうだったっけ？」

初めて話したことは分かっていたが、茂人は一応聞いてみる。

「成川君ってちょっと近寄りにくい雰囲気あったけど、話してみたら全然そんなことなかった。話しやすいわ」

「そう？」

茂人はようやく口元を弛める。……そうだよな。俺ってクールな二枚目だから。電車の窓に反射する自分の顔を見つめて、茂人は思う。その横には微笑む百合香の顔も映っている。おお！このツーショットいい眺めじゃないか！人も羨む美男美女のカップルだ。

茂人は窓を見つめてニンマリと笑う。

「私は次の駅で降りるんだけど、成川君まっすぐ家に帰る？」

「え？……そうだね」

今日も早く帰れば『にこにこ青果店』へ行く予定だった。

「良かったらレンタルビデオ店に付き合ってもらおうかと思ったん

「だけど……」

百合香が少し残念そうな顔をする。『にこにこ青果店』なんかいつだって行けるじゃないか！ 昨日買った野菜がまだたくさん残っているんだし。

「次降りる！ 俺、付き合うよ」

茂人は慌てて答えた。『付き合う』という言葉が茂人の頭の中を駆けめぐり、クラクラしてくる。付き合う……俺、百合香と付き合ってたんだ！？ 茂人は心の動揺を隠すようにクールに笑ってみせた。自分ではクールに笑ったつもりだった。

百合香もつられてフツと笑った。

「どの映画にしようかなあ？」

レンタルビデオ店で借りていたDVDを返した後、百合香は店内を見て回る。

「成川君、お勧めの映画とかある？ 私映画好きだから大抵の映画は観ちゃった」

「え？……そうだなあ」

茂人は滅多に映画を観なかった。だが、映画通の顔をしてみせる……直樹が何度も観たって言ってたの何だっけ？……アニメじゃなくで。

「これなんかどう？」

茂人はとっさに近くのDVDを取りだしてみる。

「あ、ロー・オブ・ザ・リグ？ 観たことあるわ。一作三時間くらいあるのよね」

茂人が選んだ映画は誰もが知ってる有名過ぎる映画だったが、百合香は笑顔で

茂人からDVDを受け取った。

「もう一度じっくり観てみるわ」

茂人はとりあえずホツとする。百合香と付き合うなら、もっと映画について詳しく調べなきゃいけない……。

「あつ、カード忘れてきちゃった……」

レジに並んだ百合香が、財布の中を見ながら呟いた。

「このカードなら、俺持つてるよ」

茂人は財布を取り出す。両親や健人のために時々借りに来たことがある。

「えーと、確か……」

スーパーのカードやらクリーニングのカードやらかき分けて、茂人はカードを探した。

「あつ、あつた！」

茂人がビデオ店のカードを取り出した時、何かがヒラヒラと財布から落ちてきた。百合香は身をかめてそれを拾った。

「わ、このカード可愛い」

「えっ？」

それは『にこにこ青果店』のカードだった。にこにこマークが三つ並んでいる。

「何のカード？」

「え？ あ、それ親のカードだよ」

茂人はとつさに答える。青果店のカードだとは答えにくかった。しかも、もろに美子の顔が浮かんでくる。百合香という時は、美子のことを思い出さなくなかった。主婦のような日常生活をおくっていることを百合香には知られたくない。百合香の前では、クールなイケメンで通したい茂人だった。だが、百合香に茂人がクールなイケメンと写っているかどうかは疑問だ。

第10話 気になるメール

部屋の机の前に座り、茂人はケータイを見ながらニンマリする。さつき、百合香からお礼メールが届いたところだ。女の子からメールを貰ったのは生まれて初めてだった。今までほとんど使用されていなかったメール機能をフル活用し、茂人はさっそく百合香にメールを返信する。

え〜と、顔文字と絵記号……。いきなりハートマークっていうのは、やりすぎかなあ……。花マークにしとくか、あつ間違えた！操作を間違えて、せっかく書いた文章を全部消してしまった。

チッ、またやり直した。茂人がもう一度打ち直していると、メールの着信音が鳴った。えっ？ 百合香からまたメール？？ 心の中ではもう呼び捨てだ。茂人が着信メールを見ると、直樹からのメールだった。

「なんだ、彼奴かよ……。彼奴にアドレス教えたっけ？」

不審に思いながらもメールを見てみる。そこには、『カメラは見た！ 成川君の熱愛発覚！？』と書かれ、添付画像が載っていた。

「なんだコレ！」

茂人と百合香が二人並んで歩いている写真だ。彼奴はいつの間に……。ストーカーのような直樹の写メールを不気味に思いながらも、茂人はまんざら嫌な気分はしなかった。

芸能人のスクープみたいだなあ、と少し浮かれた気分になりながら、茂人は百合香へのメールを打ち始めた。

その日から、百合香は茂人に気軽に話しかけるようになった。付き合うようになった、という関係ではないが、茂人にもようやく友達らしい友達が出来たわけだ。他の学生達は、茂人に話しかける百合香を信じられない目で見ていたが、茂人は全く気にしていなかった。

「いいなあ、成川君は。バレンタインデーには、ミス・キャンパスとラブラブな夜を過ごすんだよね……」

相変わらず茂人に付きまとう直樹が、羨望の眼差しで茂人を見つめる。

「……ま、まあ、そうだな」

茂人の頭の中を色んな想像が駆けめぐり、頬が紅潮する。

「知ってる？ 篠原百合香って、今まで誰とも付き合ったことないんだよ」

「えっ！？ ウソだろ……」

あの美貌とあの性格の良さで？ 男が放っておかないだろ。ていうか、呼び捨てにするな。

「噂では、言い寄ってくる男を片っ端から振ってるみたいだよ。男に興味ないのかな？」

「そんなことないだろ。俺には興味あるみたいだし」

「はあ、そうだね。成川君みたいなのがいいのかもね」

「そうそう」

普通の男とは一味も二味も違う茂人に興味を示す百合香は、ちょっと変わった趣味をしているのだと直樹は思った。だが、茂人は素直に喜んでいた。

と、茂人のケータイが鳴った。

「あっ、もしかして篠原百合香！？」

だから、呼び捨てにするな！ 茂人は期待しながら大慌てでケータイを見る。

「……ち、母さんだ」

期待空しく、母親からのメールだった。『帰りに「にこにこ青果店」で野菜を買って来なさい』有無を言わさぬ短いメールだった。

『にこにこ青果店』にはしばらく行ってなかった。たくさん買いこんでいた野菜も在庫がなくなってきた。ここ数日百合香のこととで頭がいっぱいで、美子のことなどすっかり忘れ去っていた。

そう言えば、あの女大学では全く会わない……。まだ、母親が

病気なのだろうか？ 何故か少しだけ気になる。自転車で片道四十分の道のりはきついがまた行ってみようかと、にこにこマークの笑顔を思い出しながら茂人は思った。

第11話 美子のきょうだい

その日の講義は夕方近くまであったため、茂人が『にこにこ青果店』に辿り着いたのは、日暮れ間近だった。息を切らせながら店に駆け込むと、小学生らしい男の子が元気に飛び出してきた。

「いらつしゃいませ！」

「……」

美子にそっくりなにこにこ笑顔。間違いなく美子の弟だと分かる。弟は二人いたみたいだけどどっちだ？ 夕食時とあつて店は買い物客で込み合っていた。早めに欲しい物をゲットして帰ろう。そう思いつつ、茂人は買い物かごを取って、店に入る。レジの所には美子の妹らしい少女が立ってレジを打っていた。その隣りには美子のもう一人の弟らしい男の子が並んで手伝っている。

それにしても、きょうだい揃って糸目の団子鼻だなあ……。きょうだい皆、顔が美子と同じだ。にこにこマークの笑顔のオンパレードだった。

「あつ、いらつしゃいませ！」

茂人が買い物かごに野菜を入れていると、背後から明るい声がした。振り返ると、美子が小さな女の子の手を引いて立っていた。多分、幼稚園に通っているとかいう妹だろう……。茂人はそう思い、美子のミニチュアのような妹の顔を眺める。

「あ、そうだ……。カードの名前間違ってるから、書き直してくれよ」

茂人は財布から『にこにこ青果店』のカードを取り出す。成川茂人が鳴河繁斗となっているカードだ。

「えっ、そうでしたか！？ 申し訳ありません！ 気付きませんでした」

美子はペコリと頭を下げる。つられて隣りのミニ美子も頭を下げた。気付け、と思いつつ、茂人はカードを美子に渡した。

「後で書き直します。少し待っていただけますか？ 洗濯物をしま

わなきゃいけないので……」

洗濯物まだ干してんの？……もう日が暮れてるぜ。

「早く取り込まなきゃ、せつかく乾いたのが湿るよ」

急いで店の奥に行こうとした美子に、茂人は声をかける。湿気た洗濯物なんて最悪だ。

「あつ、そうですね……」

「お姉ちゃん、お腹空いたよお」

小さな妹が美子を見上げてぐずり出す。

「恵子、ちよつと待って、先に洗濯物しまつからね」

「ちよつと、ちよつと急がなきゃ。……俺が仕舞ってやるよ。洗濯物どこ？」

ぐずぐずしている美子を見かねて、茂人は二人について行く。

「えっ？ 本当ですか？ 助かります！」

美子は細い目をもつと細くして嬉しそうに笑う。

「どうぞ、こちらに、洗濯物は二階のベランダです」

茂人は買い物がこを店の奥に置くと、急いで二階へと続く階段を駆け上がった。

ゲツ、洗濯物シワシワのよれよれじゃんか！？ ベランダの洗濯物を大急ぎで取り込みにかかった茂人は、シワシワのまま乾いてしまったシャツやＴシャツを見てため息をつく。

「ちよつと、洗濯物干すときは、パンパンツて叩いて皺伸ばさなきゃダメだろ」

後から二階へ上がって来た美子に茂人は言った。

「えっ！？ そうなんですか？」

「そうなんですか？ じゃねえだろ」

茂人は舌打ちし、洗濯物を抱えて部屋に戻る。美子には何故か強気になれる。

「洗濯物の干し方もわかんないの？」

「はぁ……いつもは母がやってくれるので……」

美子はシュンとして俯く。……あ、ちょっときつかったかな。茂人は少し後悔する。

「……母さん、まだ風邪治んないの？」

「はい……実は熱が下がらなくて、おととい緊急入院したんです」

「入院？　で、大丈夫なのか？」

「はい、明日には退院出来るそうです」

美子は顔を上げるとパツと笑顔になる。

「そっか、ま、良かったな」

茂人はてきぱきと洗濯物の皺を伸ばしながら、たたみ始める。わっ……パンツ……誰んだ？……。ピンク色の女物ショーツに狼狽えながら、茂人は見ないようにして手早くたたむ。

「あ、あの……」

「なっ、何だよ！？」

いきなり茂人の横に座り込んできた美子に、茂人はギクリとする。好きでパンツ触ってんじゃないからな。

「お願いがあるんです。私、これから母の入院してる病院に行かないといけないんで、もし良かったら私の代わりに夕飯を作ってもらえないでしょうか？」

「はっ？　夕飯？……」

茂人は洗濯物をたたむ手を止めて、美子を見る。

「私、料理がすごく苦手です……昨日からお弁当ばかりで済ましているんで、良かったら何か妹や弟に作ってもらえないかと。アルバイトということではいかがでしょうか？」

美子はニツコリと笑う。

「アルバイト？……」

「はい、ぜひお願いします」

茂人はフーと息を吐く。こんな新鮮な野菜に囲まれながら、弁当かよ。野菜達が泣いてるぜ。

「ま、病院行かなきゃならないんなら、しょうがないよなあ……。いいよ、そのバイトやっても」

茂人は一応嫌そうに言ってみるが、本当は料理が作りたくてうずうずしていた。

「本当ですか！ 良かった。うちの野菜も無料で差し上げますね」
「おおっ！ またもや無料でお野菜ゲット！ 茂人は心の中でガッツポーズをとっていた。」

第12話 初めてのバイト

美子が病院に行った後、茂人は台所に入って行った。

「ゲツ、食器洗ってないじゃん……」

小さな流しには、いつ置いたか分からない食器類が汚れたまま残っていた。しかも三角コーナーには生ゴミが入ったままだった。

汚い流しって許せないんだよねあ！ 茂人はムツとしながら、さっそく食器を洗いにかかる。

「お兄ちゃん、こんにちは」

さっきぐずっていた美子の妹が、テーブルについてプリンを食べている。茂人を見ると、にこにこ笑って足をブラブラさせながら、美味しそうにプリンを口に含む。お世辞にも可愛いとは言えない幼稚園児だが、にこにこ笑顔には愛嬌があった。

「……こんにちは。えっと、恵子ちゃん」

「恵ちゃんって呼んで。お兄ちゃんプリン食べる？」

「いや、今はいいよ」

小さな子の扱いに慣れてない茂人は、短く返事してスポンジに洗剤をつける。

「お兄ちゃん、名前何て言うの？」

「え、成川茂人」

「ふーん、茂ちゃんって呼んでいい？」

「……ああ」

恵子のお喋りはそれからも延々と続いた。茂人は適当に返事を返しながら、食器を片づけ、冷蔵庫の野菜や魚を使って手早く鍋料理を作った。

簡単な鍋料理にしてみたけど、味は完璧だな。茂人はスープを味見して満足する。

鍋から熱い湯気が立ち、いつでも食べられるようテーブルに食器をセットした頃、美子が帰って来た。

「お姉ちゃん、今日はお鍋だよ！ 茂ちゃんが作ってくれたの」

恵子は美子の姿を見ると走って行った。

「わあ、美味しそうな匂いがするね」

美子は団子鼻をクンクンさせながら、台所に入って来る。

「あのさ、食器くらい洗っとけよ。それに、布巾汚れてたからまな板と一緒に漂白しといた」

「ありがとうございます！ 洗う時間がなくてついそのままにしておきました」

「じゃ、俺、帰るから」

台所の時計は七時を回っていた。家には遅くなるとメールを入れていたが、帰れば家の夕飯も作らないといけない。

「成川さんも一緒に食べませんか？」

「いいよ、もう遅いし」

「そうですか。……あの、もし良かったら母親の病気が治るまで、家でバイトしてもらえませんか？」

「え？ バイト？」

「家事をしてもらいたいんです。あの、成川さん、得意そうですし」

美子はニツコリと茂人に笑顔を向ける。

「得意って訳でもないさ」

この女、俺に家政婦、いや家政夫のバイト頼むつもりか？……。

ま、こいつには家事なんか出来そうもないよなあ。バイトってやったことなかったし、小遣い稼ぎにはなるよな……。茂人は色々と考えをめぐらせる。

「バイト代にうちのお野菜もつきますよ」

美子はこの笑顔で茂人に迫る。大好きな家事の仕事だけでなく、新鮮な野菜までもらえる！ 茂人は即答で返事をしたかったが、一応考えているフリをする。

「……そうだなあ。ま、君の母さんのためだ。良いよそのバイトしても」

「ありがとうございます！」

美子はペコリと頭を下げた。恵子も真似して頭を下げる。

「では、明日から毎日学校が終わったら来て貰えますか？」

「あ、ああ」

茂人は頭を掻きながら短く返事する。クールに見せながらも、心の中では万歳をしていた。

「茂ちゃん、バイバイ！」

すっかり恵子に気に入られた茂人は、恵子に手を振ってもらいながら店を後にした。自転車の後と前の籠にはどっさりとお野菜を詰め込んでいる。

すっかり日は落ち、空には星が瞬いていた。『にこにこ青果店』に来ると何故か心が軽やかになる。茂人は自然と口笛を吹きながら、自転車を漕ぎだした。

第13話 二者択一

「あつ、でも初心者にはちょっと難しいかなあ？ 僕のお薦めとしてはねえ…… 成川君

だったら、そうだな」

「……」

直樹の映画の話は延々と続いた。昼休みも終わろうとして、学生食堂内はだいぶ静かになつてきた。こいつに映画の話を聞いたのが間違いだった。そう茂人が気付いたときは遅かった。午後の講義が始まって、直樹は話を続けていそうな勢いだ。

「あ、もうそろそろ昼休み終わるから」

直樹が一瞬言葉を切った隙に、茂人は口を挟んだ。

「その前にこれだけは知っておいた方が良くと思うんだけどさ

」

直樹は構わず話を続ける。チツと茂人が舌打ちした時、天からの救いのような声が学食に響いた。

「成川君！」

「あつ……」

百合香だ。篠原百合香が、女友達たちと一緒に茂人達のテーブルにやって来た。

美女軍団を前に茂人は急に緊張する。

「わわわっ」

流石の直樹も話をやめて美女達に目を移した。

「学校終わったらみんなでカラオケ行くんだけど、成川君も行かない？」

百合香はとびきりの笑顔を茂人に向ける。

「え？ カラオケ？……」

百合香達と一緒にカラオケ！？ これ現実？ いや、当然の成り行きだよなあ……何て言

ったって俺と百合香は付き合い始めたんだから……。茂人は自分が音痴だということも忘れてボーツとする。

百合香の女友達達が、露骨に嫌な顔をして茂人の目には入らなかった。

「もちろん」

答えかけた茂人は、ふと美子の店のバイトのことを思い出す。今日から美子の家で家事のバイトをする予定だった。学校終わってすぐに行かないと遅くなってしまう。

「あ、俺……」

や、今日は休めばいいんだよな。せつかく百合香が誘ってくれてるんだし、バイトは明日からにしたって良いさ。

「何か都合悪い？……」

百合香の澄んだ瞳が一瞬曇る。

「えっ？ ううん、悪くないよ」

こんな美人の誘いを断ってたまるか！ 美子の家の家事なんかあいつに任せたらいいんだよな。茂人は百合香に笑顔を向ける。

「良かった」

百合香はホッとした表情を浮かべた。

「鈴村君も一緒に来る？」

百合香は向かいに座る直樹に視線を向けた。百合香の不意な質問に、女友達たちは

「ええっ！！」と驚きの声を上げた。

「ぼっ、僕も行っ方がいいんですか??」

直樹は分厚い眼鏡をずり落としながら驚く。

「ええ、人数は多い方が楽しいから」

わっ、やめた方が良いのに、こいつが歌うのはマニアックなアニメの歌ばかりだ。茂人

は一度マイクを握ったら放さず歌い続ける直樹の姿を知っている。だが、そんなことは知

らない百合香は、落ち着いた笑みを浮かべたままだった。

「じゃ、お昼の講義が終わったら校門の所で待ってるね」

百合香はそう言うと、女友達たちと静かにその場を去って行った。後の方で、「なんで

あの二人を誘うの？」とか「百合香はボランティア精神旺盛なんだよ」とかいう声がした

が、茂人達の元までは届いて来なかった。

「カ、カラオケ！ 女の子と一緒にカラオケに行けるなんて〜！」

直樹はすっかり興奮している。

「ナルシーありがとう！ ああ、良い友達持って良かったなあ〜。」

僕にもか、彼女が出来るかも！！」

「……」

女の子とカラオケか……。そう言えば俺も初めてだ。しかもミス・キャンパスの百合香

と一緒になんて。茂人も直樹同様大喜びしても良いはずだった。だが、何となく心にひっ

かかるものがある。茂人は直樹に『ナルシー』と言われたことも気づかず、冷静な目で直

樹を見つめていた。

第14話 揺れる想い

「ぼつ、僕、カード持つてるから！ 何時間にしようかあ」

直樹はカラオケボックスの受付の前で立ち止まり、にやけた顔で鞆からカードを取り出す。百合香の女友達二人と茂人と直樹で、今日から開店というカラオケボックスにやって来た。

「今日は開店祝いの特別サービス料金になっております」

受付の若い女性が営業用スマイルで微笑みかける。

「じゃあ、いつもの半額なのね。成川君、何時間にする？」

百合香が、一歩後に下がって立っていた茂人を振り返った。

「え？ そうだなあ……」

茂人はぼんやりとしていた。百合香の美しい笑顔が、何故か目に入ってこない。

「と、とりあえず、四時間にしようよ」

直樹は皆の意見を待たず受付に申し出る。「ええっ！」「長くない？」という百合香の友達たちの声は、浮かれた直樹には届かない。

茂人は壁に掛かっていた時計を見た。五時を少し回っている。：

…もう、遅いよなあ。

「成川君、どうかした？」

軽くため息を吐いた茂人に気づき、百合香がたずねた。

「えっ？……や、何でもない……」

茂人の目が泳ぐ。美子の店に電話くらいしといた方がいいかもな……あつ、俺、電話番号ひかえてないや……ケータイにも登録してなかった。

「あの、俺、やっぱり今日は帰る……」

無断欠勤は良くないし、初日だし。

「えっ？」

百合香は驚いて茂人を見つめる。

「ごめん、バイトある事忘れてた」

「バイト？」

百合香の困惑した瞳に心が揺れる茂人。

「ごめん……」

揺れる心を抑えながら、茂人は足早に店を出ていった。後で茂人を呼ぶ声が聞こえたが、振り返らずに走った。

えっ？ 何やってんだろ俺？ 百合香のせつかくの誘いだっただのに……。美子のバイトなんか無視してもいいのに。茂人は自分の行動に矛盾を感じるが、頭で考えるとは別に足が勝手に進んでいた。

いったん家に帰らず、そのまま電車に乗り継いで『にこにこ青果店』に向かった。駅からだいぶ離れていたため、青果店にたどり着いた時は六時を過ぎていた。

「あつ、昨日のお兄ちゃん、いらっしやい！」

ためらいがちに店に足を踏み入れた茂人を、美子の弟が明るく出迎えてくれた。店内は昨日のように人で賑わっていた。

「あ、えーと……お姉さんは？」

茂人は頭を掻きながら店を見回した。レジの所には昨日と同じく美子の上の妹ともう一人の弟が立っていた。

「美子姉ちゃん？」

「ああ」

「お母ちゃんと一緒に部屋にいるよ。どうぞ、入って」

ああ、今日退院するとか言ってたよな。茂人は小さな弟に案内されながら、店の奥に入って行った。

「こんばんは」

小さく声をかけたが返事はなかった。

「こんばんは！」

今度は大きな声で挨拶すると、ドタドタと走ってくる足音がした。

「あつ！ 成川さん！ お待ちしてました！」

美子は茂人の姿を見ると、遅れたことを気にしてる風もなく、いつものにこにこ笑顔を向けた。

「……」

茂人はちよつと拍子抜けした。嫌な顔するとか、たしなめるとか、そういう反応をするのが普通だと思った。なら、別に俺がバイトすつぽかしても何とも思わなかったのかもな、と茂人は考えたりした。「あのさ、昨日はちゃんと時間決めてなかったけど、バイトって何時から？」

「時間ですか？　そうですね、何時からでも構いませんよ。成川さんの好きにしていただいて」

美子は細い目をもつと細くして笑う。……こいつ、怒ることあるのかな？

「そ、じゃ、バイト代は俺が来た時間からで良いよ」

なんだ、それなら焦ってバイトに来なくて良かった。茂人は少し後悔する。一時間くらいなら百合香とカラオケで過ごせたはずだ。

「あの、母親に会ってくれますか？　母がぜひ挨拶したいと言っているんで」

そのまま台所へ行こうとした茂人に、美子は言った。

「母は成川さんにとっても感謝しているんです」

第15話 美子の両親

「え？……俺、何かしたっけ？」

茂人はポリポリと頭を掻く。急に真剣な顔をして茂人を見つめる美子に、茂人は少し照れた。

「うちに来てくれて家事を手伝ってもらえて、すごく助かってます。家族みんな感謝してます」

「でも、これバイトだし」

「成川さんの気持ちが嬉しいんです！ 私、ほんとに家事が苦手なんです」

美子がにこつと笑う。

「……」

あれ？ なんだ？ 今、こいつのこと一瞬だけ可愛いなんて思ったぞ……。茂人は自分自身の気持ちに驚く。何でだ？ こいつってブスなのに……。

茂人は頭を左右にササツと振って、心の動揺を紛らわせた。

「じゃ、挨拶だけでも」

「はい！」

茂人は美子に導かれ、奥の部屋に行った。畳みを敷いた和室に仏壇が置かれ、美子の母は手前に布団を敷いて横になっていた。美子の母も美子にそっくりだった。当たり前のことだが、血の濃い家族だと茂人は思う。

「成川さんですね？ 美子がお世話になっております」

美子の母は、布団から体を起こし笑顔を向ける。

「あ、いえ……こちらこそ」

元来人見知りの激しい茂人は、どう挨拶していいか分からず戸惑う。

「美子に家事のこと色々教えてやって下さいね」

「あ、はい……」

茂人は軽く頭を下げる。

「美子の言ってたとおりです」

母親は茂人を見ながらフツツと笑った。

「え？」

「成川さんはとてもハンサムな方ですね」

「は？」

茂人は固まる。今思えば、人からハンサムなどと言われたのは初めてだった。自分ではそんなの当然だ思っけていても、人からは言われたことなどない。

……そりゃそうさ、誰が見たって……。茂人はそう思い軽く笑おうとしたが、顔が強ばって笑えなかった。美子に目を移すと、相変わらずにこにこと笑っていた。

「これからも美子のことをお願いしますね。美子にボーイフレンドが出来たの初めてなんですよ」

「はあ……」

何をお願いされたのだろうか、茂人は曖昧に返事する。

「美子は良い子です。顔だって昔美人でしょう？」

「……」

昔美人？ 確かに目が細くて下ぶくれで……。今が平安時代なら、紫式部なみの美人かもなあ……。茂人はどう答えて良いか分からず、少しだけ口元をあげて笑った。

「お二人がこれからもずっとお付き合いしてくださいと嬉しいですよ」

「お母さん、成川さんとはまだ知り合っただけだから」

美子が膨らんだ頬を赤く染めて笑った。……なんだ、この雰囲気は、まるで親に彼氏でも紹介してるみたいじゃないか！

「あの、それじゃ、遅くなるんで夕ご飯作ってきます」

茂人は気持ちを切り替え、サツと立ち上がった。勘違いしないでくれよな、俺、ここにバイトに来ただけだから。

「はい！ お願いします」

美子は明るく返事して、仏壇の方へと歩いて行った。ああ、美子

の父親半年前に亡くなったとか言ってたっけ……。茂人はチラリと仏壇の方へ目をやる。遺影には美子の父親の姿があった。似たもの夫婦なのかと思っていた茂人だが、美子の父親はきりりとした顔立ちの男前だった。美子たちきょうだいはみんな母親似だと言うことが茂人には分かった。美子は仏壇に供えていたリンゴとバナナをさげて、茂人の方へ歩いてきた。随分長く供えていたらしく、バナナはシミだらけになり、リンゴも腐りかけの匂いが鼻をつく。

「もっと早く取り替えろよ」

「忙しくてつい忘れてました。でも、今日は新鮮な苺をお供えするんで、父も許してくれると思います」

美子は屈託なく笑う。後で美子の母親が目細めてその様子を見つめていた。なんとなく、茂人は美子達親子の家族の絆を感じる。美子がこんなに素直で明るいの、きっと家族の中に愛がいっぱい溢れているからだと思ったりする。茂人は美子の細い目と団子鼻につい見とれてしまっていた。

第16話 恋煩い

昨日からどうもおかしい、と茂人は思う。何故か美子の顔が頭から離れない。どこをどう見ても美人とは言えない美子の顔。俺、熱でもあるのかなあ……。自分で自分の額に触ってみるが、普段どおりの平熱の温かさだ。

眠る前だつて美子のにこにこ笑顔と明るい声が頭に浮かんで、なかなか寝付けなかった。美子が夢にまで出てくるんじゃないかと思つたくらいだ。だが、美子のことを頭に描くと、なんとなく心地よくてほんわかとした気分になる。夢に美子は出てこなかったが、いつの間にか眠っていた。

おかしい、絶対おかしい！ あんなに不細工な顔なのに。茂人はハァーとため息をついて、教室の机に突つ伏した。今朝はのんびり家でくつろぐ気にもなれなかったから、早めに学校に出てきた。

「あつ、成川く〜ん！」

ダラリと机に伏している茂人の元に、直樹が駆け寄ってきた。今日はいつも以上にテンションが高い。

「どうしたの？ まだ眠いの？」

直樹は茂人の横の席につく。

「昨日は急に帰ったりしてさあ。すごく楽しかったんだよ。成川君も来れば良かったのに」

茂人はゆっくりと身を起こす。そうだ、昨日はカラオケをドタキヤンしたんだ……。百合香は怒っていないだろうか？ 茂人はキョロキョロと百合香の姿を探すが、この講義を百合香は受講していないことに気付いた。

「……お前、四時間も歌つたのか？」

「うん、みんなとは四時間歌つた。と言ってもねえ、みんな恥ずかしがって歌おうとしないから、ほとんど僕が歌つたよ。歌つてるとすぐくのってきたから、みんなが帰った後も僕一人で二時間歌つた

んだあ」

茂人は深く息を吐く。恥ずかしがった訳じゃなくて、直樹の歌にドンビキしたんだ。きつと、最悪の雰囲気だったんだろうなあ……。もう二度と百合香達からはカラオケには誘われないうと、茂人は確信した。

「ねえ、どうしたの成川君？　なんか元気ないね」

直樹は心配している風もなく、ヘラヘラ笑って聞いた。

「お前なんかに聞いても無駄だろうと思うけどさ……」

「えっ？　何々？　もしかして恋煩い！？」

「恋煩い？……」

茂人は直樹の分厚い眼鏡を見つめたまま固まった。茂人の胸が小さく疼く。

「わ、わっ！　成川君凶星？」

直樹が眼鏡の奥で目を瞬かせる。

「篠原百合香の顔が頭から離れなくて、ずっとな彼女のことばかり考えてるんですよ」

「百合香？……」

いや、俺の頭から離れないのは百合香の顔じゃなくて……。茂人の頭にまた美子の顔　が浮かんできて、心臓がバクバクしてきた。

「ああ、いいなあ　そんなに人を好きになるなんてさあ。あっちも成川君に気があるみたいだしね」

「……」

や、百合香じゃないんだ。……えっ？　でも、まさかあの女なんか……。茂人は動揺する。

「もうすぐバレンタインなんだし、きつと篠原百合香からアピールあるんだろうなあ。いつその事成川君の方からも彼女にアピールすれば？」

「……」

「成川君？　聞いている？」

「え？　あ、ああ」

「いいよなあ。本物の恋なんてさ。僕はまだアニメキャラの女の子にしか恋せないんだよね」

「……」

恋。考えてみると、茂人は今まで一度も女の子を好きになったことがなかった。自分の周りに女の子が寄って来ないことを不思議に思いながらも、茂人の方から近寄って行くということがなかった。百合香のように、いいなあと思う女の子は今までも何人かいたが、この気持ちは今までとは違う。

何考えたんだろ、俺！ 美子なんか考えられない。俺が好きなのは百合香だ！ 茂人はそう思いこもうとするが、追い払っても追いかけても美子の笑顔が頭から離れなかった。

「ねえ、成川君、本当に大丈夫？」

さっきから黙って頭をブンブン振っている茂人を、直樹は不思議そうに見つめた。

「こりゃ、重症の恋煩いだね」

直樹の言うことなど茂人の耳には届かない。もちろんその日の教授の声も全く耳には入ってこなかった。

第17話 近づくバレンタイン

直樹の奴、なかなか鋭いな。俺の心見通しって感じだったぞ。

茂人は学生食堂のテーブルについて、カツカレー定食を一人で食べていた。いつもくつついて来る直樹が午前中で帰ったから、今日はゆっくりと食事が出来る。

やっぱ、このポテトサラダはうまい！ 茂人は、カツカレーと一緒にについているポテトサラダを美味しそうに口に含む。

「……」

そう言えば、美子と初めて出会ったのは学食だった。美子がいきなりぶつかって来て、カツカレー定食を体中にぶちまけられた。美子はあのポテトサラダを食べたのだろうか？ 口をモグモグさせサラダを味わいながら、茂人はふと考える。あいつ、変だったよなあ、ポテトサラダなんかにもキになって……。

ひっくり返らず無事だったポテトサラダを、美子が茂人に食べるよう勧めたことを思い出し、茂人は口元を弛める。そのとたん、再び頭の中に大きく美子のにこにこ笑顔が浮かび、茂人は狼狽える。

「全く、何なんだあの女は……」

頬を紅潮させ、茂人は低く呟く。

「成川君、ここ空いてる？」

茂人が動揺していると、向かいの席に誰かが座った。

「あっ」

顔を上げると、正面に百合香の笑顔があつた。

「どうぞ」

茂人も百合香に笑顔を返す。俺が求めているのはこの笑顔！ 百合香のような品のある美しい笑顔だ。百合香にはさっき昨日のことを詫びていた。百合香は「バイトなら仕方ないね」と優しく許してくれたのだ。

「篠原さん、それだけ？」

百合香のトレーには野菜サラダと飲み物が乗っているだけだった。

「今、ダイエット中なの」

百合香がフツと笑う。

「ダイエット？ 篠原さん全然太ってないじゃん」

「油断したらすぐ太っちゃうの。だから、気をつけなくちゃ」

百合香はスマートだ。それに比べ美子は、全体的にぼっちゃりしていてコロコロしている。ダイエットに気をつけなきゃいけないのは美子の方だと茂人は思う。まあ、あの女がスタイルのことを気にするとは思えないよなあ。

「成川君、何か良いことあった？」

突然、百合香が茂人を見つめて言った。

「え？」

「何だか今日はいつもと違って楽しそうなもの」

「そうかなあ？」

「さっきからずっとニコニコしてるでしょ」

そりゃ、百合香と向かい合って食事しているからなあ。……あれ

？ 今日なんか百合香と普通に喋っている。

茂人はふと気がついた。ついこの前までは、百合香と顔を合わすだけでドキドキしていたというのに。今は、ちゃんと百合香の目を見て話すことが出来た。

「ホント？ 自分では気付かなかった」

「成川君ってあまり笑わない人だと思っていたから。でも、成川君は笑顔の方が良いと思うよ」

あれ？ 俺、クールなイケメンはずだったよな……。ま、いいか笑顔の好青年でも。この方が楽し。茂人はそう思いながら、ハハと笑って頭を掻いた。

「もうすぐバレンタインだね」

百合香がサラダを頬張りながら言った。

「え？ ああ、そうだね」

バレンタイン・デイか……。今年も弟の健人が貰ったチョコを食

うのかなあ。

「大抵の大学って一月の試験が終われば終了するのに、ここは二月いっぱい講義があるでしょ。だから、バレンタインのやりとりが学校で出来るって喜んでる子もいるのよ」

「ふーん、学校なんか早く終わった方がいいのにな。篠原さんは毎年誰かにチヨコあげてるの？」

「うっん」

百合香は首を振って視線を落とした。

「私は本命の人にしかあげない」

「今年は誰かにあげる？」

「……うん。手作りのチヨコを渡そうかと思ってるの」

百合香はそう言うと、笑みを浮かべながら黙々とサラダを食べ続けた。茂人は一瞬ドキリとするが、その相手が自分だという気がしなかった。あれほど百合香手作りのチヨコレートを買いたいと願っていたはずなのに。貰ったら嬉しいだろうなあ、と他人事のような気持ちになっていた。百合香が黙り込んでしまったので、茂人はチヨコレートを作るのも得意だという話を始めた。自分でも今日は良く喋るなあと思う茂人だった。

第18話 手作りチョコ

茂人は『にこにこ青果店』までのサイクリングにもすっかり慣れてきた。筋肉痛もおこらない。出来る限りの近道を探し、ツーリングを楽しむ余裕も出てきた。

家事のバイトを初めて数日が経つ。最近、茂人は極力美子を避けていた。あの美子の笑顔を目にすると、どうも調子が狂ってしまう。いつもろくに会話もしないで、ササッと台所に入って料理を作っていた。

全く、おかしいよなあ、俺……。美子のことを思い描くだけで胸がドキドキしてくる。

何でだろ？ あんな女、全然俺の趣味じゃないのに……。茂人はフーッと息を吐いて自転車を下りると、店に入って行った。

「あつ、茂人さん、こんにちは」

今日は店のレジに美子の母親が立っていた。美子の母に『茂人さん』なんて言われると、婿養子にでもなったような気がする茂人だった。

「こんにちは……」

茂人はポリポリと頭を掻きながら、店の奥へ進む。

「具合、もう良いんですか？」

「はい、大分良くなってきましたから、今日から店に立っているんですよ。子供たちに店番ばかりさせるのも可愛そうですからね」

美子の母は美子にそっくりな顔で微笑む。店内には数人の客と、美子の上の妹が商品を陳列していた。小学生の弟二人と幼稚園の恵子はいなかった。

「あれ？……美子さんは？」

茂人は、『美子さん』などと自分で言って自分で照れる。

「さつきから台所で何か作ってるんですよ。すぐ終わると言っておきながらまだ戻って来ません。料理は茂人さんにお任せすればいい

んですけどねえ」

美子の母は、おっとりとした調子でそう言った。

「……」

美子の奴、何を作っているんだろうか？ あの女に料理など作れるのか？ 茂人は不安を抱きながら、台所へ入って行った。中からは甘い香りと焦げ臭いような匂いが漂ってくる。

「あつ、成川さん、こんにちは」

美子が鍋をかき混ぜながら、茂人の方を振り返った。

「……何やってんの？」

茂人は恐る恐る美子がかき混ぜている鍋を覗き込んでみた。鍋には溶けたチョコレートがブクブクと泡を出して煮えていた。

「焦げてるぜ」

「はあ、また失敗ですね。何回やってもチョコレートが上手く溶けないんです」

美子は鍋をかき混ぜるのをやめて、火を止めた。

「バカだなあ、チョコレートを溶かす時は湯煎にしなきゃダメだろ」

「湯煎？……」

美子がキョトンとした顔で茂人を見つめる。茂人は美子の顔を見ないようにして、焦げついた鍋を流しに持って行った。

「湯煎も知らねえの？」

「はい」

茂人はハアと息をつくとき、鍋にザザーッとお湯を入れた。

「あのね、チョコレートやバターを溶かす時は、直接鍋の中に入れないで、まず容器に入れてからその容器をお湯に浸すんだよ。そしてたらのチョコレートやバターが溶けるんだ。間接的に物を熱することを湯煎って言うんだよ。覚えとけ」

「ええっ、そうなんですか？ 知りませんでした。ありがとうございます！」

美子は茂人の顔を覗き込むようにして微笑んだ。わっ、近寄るな。笑顔を俺に向けるな。胸がドキドキし始め、茂人は慌てて鍋をゴシ

ゴシと擦った。

「今度は『湯煎』で試してみます。バレンタインデーまでにはどうしても手作りのチョコレートを作りたいので」

「バレンタインデー？」

茂人は鍋を擦る手を止め、美子の方を見た。も、もしかして俺に手作りチョコを渡すつもりなんだろうか！？ 美子のニコニコ笑顔をもろに見つめ、茂人の顔は湯気が出そうになるくらい赤くなる。

「だっ、誰に渡すんだよ」

「……」

美子は視線を落とすと、恥ずかしそうに笑う。『俺はいらないからな！ 俺は百合香のチョコを貰うんだからな！』茂人がそう言うおとした時、

「父にあげるんです」

美子がポツリと言った。茂人は喉元まで出かかった言葉を辛うじて飲み込む。

「去年まではいつも買ってきたチョコレートを渡していたんですけど……今年は初めて手作りチョコが作りたくて。本当は生きてるうちに食べさせてあげたかったです」

「あ、ああ、そう……」

茂人は大きく深呼吸する。何なんだこの女！ 人をビックリさせて。美子がチョコを渡す相手が父親だったのは、良かったのか良くなかったのか、茂人には分からなくなってきた。

「あの、俺、手作りチョコ得意だから、作り方教えてやるよ」

「本当ですか！ 嬉しいです！」

美子の顔がパアと明るくなる。

「バレンタインまでには覚えとけよ。……チョコ作りの時間もバイト代に入れといてくれよな」

「はい！ 私、店からチョコレート持って来ます！」

美子はそう言うと、ドタドタと店の方へ走って行った。茂人は、またハアとため息をついた。体の力が一気に抜けていく気がした。

今夜もずっと美子の笑顔に悩まされることは間違いなかった。

第19話 初恋？

「美味しいです！　すごく美味しいです！」

茂人の手作りトリュフを、美子は一口頬張って感激の声を上げる。
「もう一個食べていいですか？」

美子は茂人の返事を待たずに、もう一粒口に入れてモグモグさせる。

「まだ柔らかいだろ。本当は後二、三時間室温で乾かした方がいいんだ」

「そうなんですか？　でも、これで全然美味しいですよ。成川さん、スゴイです！」

「いやあ、それ程でも」

茂人はそう言いながらも、トリュフチョコの出来具合に満足する。美子はニコニコしながら、三個目のチョコを口に入れる。……よく食うなあ。美子は、下ぶくれのほっぺたを一層膨らませてチョコを食べている。

「あ、もうこんな時間か」

壁の時計に目を移すと、六時五分前になっていた。いつもなら茂人は六時過ぎには帰っている。

「今日は何作ろうか……」

「何でも良いですよ」

美子は笑みを浮かべて、四個目のトリュフに手を伸ばす。

「おい、全部食べんなよ。きょうだいにも分けてやれ」

「あつ、そうですね。でも、私がまた作りますから」

こいつ、ちゃんと作れるのかな？　茂人は不安だ。

「じゃ、今日は簡単にカレーにする。それと、ポテトサラダ」

茂人は昼に学食で食べたカツカレー定食を思い出して、それを作ることにした。

「わあ、良いですね。私も手伝いましょうか？」

「いい」

茂人は即答する。美子に手伝われると余計に時間がかかりそうだから、美子が側に居ると落ち着かない。

「……あの、もう向こう行つていいから」

なかなか台所を出ていかない美子に茂人は言った。美子は黙ったままニコニコ笑つて茂人を見ている。チョコ作りに専念して、美子を意識しないようにしていた茂人の気が一気に弛み、また心臓がドキドキし始める。

「……何？」

「成川さん、素敵です」

「えっ!？」

茂人の心臓が口から飛び出そうになる。美子はフツツと目を更に細めて笑う。

「真剣に料理に専念している姿。亡くなった父にそっくりです。父がお店で一生懸命働いている姿、私大好きだったんです」

「……」

茂人の体中から変な汗が噴き出そうになる。何だ!？ これって愛の告白？ 美子の膨れた頬が心なしに赤く染まっているような気がする。

「私、成川さんのこと」

「あっ! そ、そう言えば、あのサラダ、学食でぶつかつた時のポテトサラダ、食つたんだよな」

『成川さんのこと好きです!』と言われるのを恐れ、茂人はとっさに話題を変える。

「え?……あ、はい、いただきました! とても美味しかったです」

「そ、そう」

茂人はフツツと息を吐き、冷蔵庫の方に移動する。

「私、お店で食べ物扱っているせいか、食べ物粗末に出来ない人なんです」

「ふっん……」

茂人は冷蔵庫の中を探る。冷たい冷気が火照った顔にあたり気持ちいい。

「では、成川さん、お料理お願いします！」

ようやく美子は台所から出ていった。美子が去った後も茂人の胸はしばらくドキドキと鳴り響いていた。

その日の夜も、茂人はやはりなかなか寝付けなかった。美子のニコニコ笑顔を目一杯見てしまったため、脳裏に焼き付いて離れない……バイトやめよう……もう、美子の母親も元気になったんだし、いいよな辞めたって。茂人はベットの中で考えた。そうすれば気が楽になる。美子のせいで眠れぬ夜もなくなるはずだ。しかし、バイトを辞めようと思うと、何故かしら後ろ髪引かれるような寂しい気もする茂人だった。

茂人があれこれ考えていると、突然暗闇の中でケータイが鳴った。まさか、美子では！？美子から電話がかかってくることはありえないが、茂人は一瞬ビクツとする。

ケータイを手にとって見ると、直樹からだった。

何だ彼奴は紛らわしい！　こんな夜更けに！

「もしもし？」

そう思いながら電話に出ると、いきなり咳きこむ音が耳に響いた。

「ゴホッ、ゴホッ……あ、ナルシー、僕、やばいよ」

弱々しい直樹の声が聞こえ、また咳の音がする。

「何？」

「熱が九十三度もあってさあ……インフルエンザだって……」

九十三度？？　沸騰直前だよ。

「三十九度だろ」

「え？……何？　頭回らない」

「で、何の用？」

「えー、ナルシー冷たいよお……親友がインフルエンザで苦しんでいるのにい」

「だったら、電話しないで寝とけばいいだろ」

「……僕はねえ、心配なんだよ。しばらくインフルエンザで大学行けないから、ナルシーの恋の行方が気になって……ゴホッ」

「お前には関係ないだろ」

「あるよお……ナルシーの初恋なんだから」

「初恋？」

茂人はドキツとする。確かに今まで人を好きになったことがなかった。と言うことは、これは初恋ということになるんだろうか？

「二十歳の初恋ってすっごく遅いけどさあ……頑張っただけでバレンタインデーまでに僕は復活出来ないかもしれないから、心配で……ああ、もう限界……」

直樹はまた咳き込み、電話はそのまま切れた。

……何だ彼奴は？ 茂人はケータイを切る。バレンタインの日に直樹がいないのは、ラッキーな気もする。彼奴がいると余計面倒なことになりそうだ。

「……初恋」

美子の顔がまた浮かぶ。俺の初恋の相手が美子？ あの昔美人の美子？ 茂人の心はとても複雑だった。初恋の相手っていうのは、百合香のような手の届かない美人じゃないのか？ ……美子かあ。茂人はハアと息を吐く。俺のタイプって美子のような女だったのかなあ？ ……なんかレベル低いよなあ。茂人は直樹の電話のせいで余計に目がさえ、眠れなくなってしまった。

第20話 学生食堂にて

翌日。茂人は寝ぼけ眼のまま大学へ行った。立春を過ぎ季節は春へと移り変わるうとしてしている。吹き抜ける風はまだまだ冷たかったが、日差しは柔らかく春の到来を感じる。

穏やかな日の光は更に眠気を誘い、茂人の頭の中は一足早く春が来たかのようにポワンとしていた。

睡魔と戦いながら午前中の講義を受け、昼休みは爆睡するぞ！
と思いつつ学生食堂に向かった。何を食べるか考えるのも面倒だったので、茂人は日替わり定食Aを選んだ。今日は鳥の唐揚げとスープだった。

「成川さん！」

茂人がトレイを持って席に移動していると、突然正面に美子が現れた。茂人はギクリとし、トレイを持つ手に力を入れた。

またぶつかることだったじゃないか！？ 茂人はムツとして美子を睨むが、美子と目が合ったとたん、動悸が激しくなる。美子は細い目をもっと細くして微笑む。昨夜茂人の頭から離れなかったニコニコ笑顔が、ドアップで目の前に現れる。

「あ、……今日から学校来たんだな」

茂人は美子から視線を外し、平静を装って言った。

「はい、もうすぐ学校も春休みなので、母はもう行かなくていいんじゃないかと言っていたんですが、講義にはなるべく出ておきたいので」

「ふーん」

茂人は美子から逃れるように、トレイを持って移動する。美子はその後についてきた。

「成川さん、同じですね」

「え？ 何が？」

ついてくんなよ！ 心の中で茂人は叫ぶ。

「日替わり定食Aセット。私、唐揚げ大好きなんです」

「……」

美子のトレーに目をやると、茶碗につがれたご飯が山盛りになっていて、

「ご飯、多いんじゃない？」

「私、ご飯大好きなんですよ。家ではいつも三杯はおかわりしてます」

美子はフフフと笑った。やっぱり美子の頭の中にはダイエットなどという言葉ないらしい。茂人は大きいため息をついて、四人がけのテーブルについた。美子は茂人の横に座る。美子が向かいの席に座らなかったことに、茂人はホッとした。

だが、後から同じテーブルに来たカップルは、迷惑そうな顔を二人に向ける。

「向かい合って座ってくんない？」

男がそう言い、茂人は渋々席を替わろうと腰を上げた。

「あ、すみません。私並んで座る方が好きなんです」

美子が男ににこにこ笑顔を向ける。顔は笑っているのに、どつしりと腰を下ろしてても動かないという姿勢だ。男は舌打ちすると、彼女を連れて他のテーブルの方に行った。

「悪かったでしょうか？ でも、向かい側に成川さんがいると、落ち着いて食べられなくて」

「……」

どういう意味だろうか？ やっぱ、俺に気があるんだよねあ……。

茂人は美子の横顔をチラリと見て、頬を染めた。

そんな茂人の気持ちを知ってか知らずか、美子はフフツと笑うと日替わり定食Aセットを食べ始めた。美子は図々しいのか謙虚なのか、茂人は分からなくなる。……しかし、よく食うなあ。

パクパクと大きな口を開けて美味しそうにご飯を食べる美子に、茂人は感心した。

「あ、ナルシー、珍しく女の子と一緒に食べてるよ」

百合香と女友達たちは、遠目に茂人と美子を見てクスクスと笑った。

「……」

百合香はじつと二人の様子を見つめる。

「あの子、一回生の本城美子って子でしょ？ 家が八百屋の」

「そうなの？ 知らないなあ」

「結構有名なのよ。ちよつと変わってるって言うか、マイナス美人なことか」

「でも、ナルシーとならお似合いよねえ。すごく良い雰囲気じゃない」

女友達二人は顔を見合わせて笑った。

「やめなさいよ。陰口なんて感じ悪いわ」

百合香は友達たちを一瞥すると、茂人達のテーブルとは反対方向に歩いて行く。

「百合香待つてよ」

友達の呼ぶ声を見無視し、百合香は一人でスタスタと歩いて行った。

「どうしたんだろ？ 百合香、珍しく機嫌悪いね」

「さあ……。でも、風の噂では、百合香はナルシーに気があるって話だよ」

「えーっ！ 信じらんない！」

女友達の一人は、茂人に目をやる。茂人はおどおどしながら定食を食べていた。時折、居心地悪そうに美子の顔にチラチラを視線を送っている。

「どこが良いんだろ？」

「さあねえ」

友達二人は目を丸くして、しばし茂人と美子に見入っていた。

第21話 本気の本気

「あのさあ……」

茂人は箸を休めて、口を開く。今日は食欲がない。日替わり定食Aセットもまだ半分しか食べていなかった。

「はい？ 何でしょう？」

美子は最後の唐揚げを口に入れると、茂人の方を向いた。山盛りのご飯も全てたいらげ、美子のトレーは綺麗に片づいている。

「俺、バイト辞めようと思うんだけど……」

茂人は美子の顔を見ずに答えた。

「お母さんの具合も良くなっただろ、別に俺がいなくても大丈夫そうだし」

「そうですね」

美子は口をモグモグさせて唐揚げを飲み込むと、最後に一気にコップの水を飲んだ。

「ごちそうさまでした！」

まるで洗ったかのように綺麗になった食器を前にして、美子は両手を合わせた。

「私、図書室に用があるので、これで失礼しますね」

美子は腕時計を確認しながら立ち上がった。

「あ、ちよつと」

まだ話終わってないだろ。俺が考えに考えてバイト辞めるって言うてんのに、『そうですね』の一言で済ませるのかよ。

「すみません、急いでいるもので」

「で、良いの？ 辞めても」

「成川さんが辞めたいのなら構いませんよ。バイト代は計算して後でお渡ししますね」

美子はニコツと微笑みかけると、トレーを持って足早に去っていった。

「……」

茂人は、スタスタと歩いて行く美子の後ろ姿を目で追った。どつと力が抜けていく。

なんだ、あの女は！？ 人の気も知らないで。もうちょっと残念がるとか寂しがるとか出来ないのかね？ 茂人はもう定食を食べる気もしなくなり、コップの水をゴクリと一口飲む。

待てよ。俺、美子に何期待してんだろ？ 『成川さん、辞めないうでください！』なんて言葉を期待してるのかな？……。あの細い目をウルウルさせて。そんな事を考え、茂人の頬は赤くなる。

ばかばかしい。茂人は半分残った定食のトレーを持つと、席を立った。

学食を出た後、茂人は中庭の芝生に出てベンチに腰掛けた。春を思わせるような日差しがポカポカと降り注いで、日向ぼっこにはちょうどいい。風は少し冷たかったが、さわさわと木々を揺らす風の音は、子守歌のように耳に心地良かった。

茂人はポケットからコンパクトを取りだし、鏡の中の自分の顔を見してみる。目がとろんとして、瞼がくつつきそうになっている。：そう言えば、最近コンパクトを覗いたり、鏡に映る自分の姿をチェックしたりしてなかったなあ。茂人はふと思った。

前は、自分のことにしか興味がなかったような気がする。何でも自分が一番。全ては自分中心に回っている。他人のことになど関心なかった。

でも、今は。コンパクトの中の茂人の頬がピンクに染まる。

「成川君、隣り構わない？」

ボーッとしていた茂人の斜め上から、突然声が聞こえた。

「あっ」

仰ぎ見た茂人の視線の先には、百合香の笑顔があった。茂人は慌ててコンパクトをしまう。

「ど、どうぞ……なんか、暑いね今日は」

百合香が隣りに座り、茂人は手で顔に風を送りながら無意味に笑った。

「良い天気よね」

百合香も茂人に合わせて笑った。笑い合った後、しばらく沈黙が続く。百合香、俺に何の用だろ？ 軽い緊張感で、茂人の眠気は飛んでいった。

「……あの」

「成川君」

茂人が話を探して口を開くと、百合香が茂人の方に向いて声をかけた。

「はい」

茂人は声をうわずらせて返事をする。

「この前話したわよね。バレンタインに手作りのチョコを渡すって」

「あ、うん……」

俺にくれるって事かな？ 緊張感が高まる。

「私、本気で好きな人にしか渡さないの」

「あ……義理とか友達には渡さないタイプなんだ」

茂人は顔を強ばらせて笑った。百合香の真剣な表情に笑うしかない状況だった。

「軽い気持ちでとか遊びでは、恋愛はしたくないの。本気の恋愛がしたいのよ。分かる？」

「……うん」

つまり、チョコを渡された相手は結婚を前提とした付き合いが始まるってこと！？……茂人はゴクリとつばを飲み込む。

「だから、私ってなかなか恋愛出来ないんだと思う……」

百合香は目を伏せて、自分の手を弄んだ。……百合香ならいいじゃないか。け、結婚相手になったとしても。茂人は百合香の花嫁姿を想像したりする。

「でも」

百合香は顔を上げると茂人を見つめた。その美しい顔に茂人はド

キツとする。やっぱり百合香は綺麗だよなあ……。最近美子の顔ばかり頭に浮かんでいたため、茂人は余計にそう感じた。

「私は、相手にも同じように真剣で本気の恋愛をして貰いたいと思ってる。だから、もし相手にそういう気持ちがないなら、チヨコは受け取って欲しくないと思うの」

「う、うん……」

茂人は冷や汗が出てきそうだった。これは、俺への忠告だろうか？ 百合香ならいいじゃないか、望むところだ。

「お、俺もそう思うよ。恋愛するのは本気の本気でしなきゃいけないって」

茂人はどうにか笑顔を作りそう言った。額からタラリと一筋汗が流れ落ちた。

第22話 バレンタイン・デイ、運命の日

明日はバレンタイン・デイ。

ベッドに入った茂人は、なかなか眠れないでいた。このところ寝不足気味だ。食欲も落ちて体重も減った気がする。ハァーと、茂人は深くため息をつく。今夜は特に眠れそうもない。

美子の店のバイトにも行っていない。まだ正式に辞めた訳ではないが、ここ数日は店に行く気がしなかった。美子にも会っていないかった。

さっき百合香からメールが届いた。内容は、『明日、授業が終わったら中庭に来て』という簡単なメッセージだった。明日がバレンタインということを見ると、百合香がチョコを渡すのだろうということは分かり切っていた。

真剣な恋愛。本気の恋愛……。あの憧れの百合香と本気の恋愛が出来るなんて、最高の幸せのはずだ。『付き合ってください！』なんて言われたら、一つ返事でOKだ！

しかし、そう思っても、茂人は何か心に引っかかるものがあつて、幸せな気分になれないのだった。その原因は美子に間違いない。百合香のことを思い描こうとしても、何故か美子の顔が浮かんでくる。真面目で一途な百合香は、相手が他の女のことを考えているなんてことは許せないだろう。

百合香をふるなんて、そんなもつたいたい事出来ない！ あんなに美人でスタイルよくて優しいのに、手放せるか！ 百合香の真剣な眼差しを思い出し、そんなことを考える自分に自己嫌悪を抱く。茂人は頭から布団を被ると、ウオーツ！ と声にならない叫び声を上げた。こんな時は直樹と馬鹿話で気を紛らせると良いが、直樹はまだインフルエンザでダウンしていた。

頭はどんどん冴えてきていっこうに眠れそうもない。バレンタインなんかなければいいのに……。茂人は布団をはねのけるとベッド

に身を起こした。ここ数日の寝不足のため、目の下にはくつきりとクマが出来ている。明日は一層酷いクマになりそうだ。

どうせ眠れないんだ。なら、いつそのことずっと起きているか。

……逆バレンタインなんてのも有りかもしれないし。茂人はふとある事を思いつき、上着を羽織ると台所に駆け下りていった。

バレンタイン当日。

前日の晴天とうって変わり、朝からどんよりと曇っていて今にも雨が降りそうだった。昨夜、茂人は結局一睡も出来なかった。徹夜明けのぼんやりとした頭で大学に向かい、半分眠ったような状態で講義を受けた。

バレンタインということで、キャンパス内は朝からざわめいていた。浮かれた顔をした人、ソワソワと落ち着きのない人。義理チョコ、友チョコ、本命チョコの受け渡しは、既に朝一番から始まっていた。

茂人は今年も義理チョコ類は一個も貰えなかった。まだ、去年までのように何も考えずのほほんとバレンタイン・デイをやり過ごす方が良かった。今年は運命の『本命チョコ』が待っている。帰りに中庭に行くのが恐い。バレンタイン・デイなんかなくなれ！と茂人はまた思う。

傘持つて来るの忘れた。茂人は泣き出しそうな空を見上げて気付いた。家に帰るまでなんとかもってくれたらいいけど。

講義が終わり、ついに運命の時が訪れる。茂人の頭はブレイク寸前だった。もうどうにでもなれ！緊張と不安を通り越し、茂人は開き直る。

中庭のベンチに腰掛け、百合香が来るのを待った。今日、何度か百合香の姿を見かけたが、出来るだけ近寄らないようにして話もしていない。百合香の方も茂人を避けていたようだ。

「あつ……」

足を投げ出しダラリとベンチに座っていた茂人だが、百合香の姿を発見すると胸がドキドキ高鳴ってきた。慌てて姿勢を正し座りなおる。百合香が手に抱えている透明ラップでくるんだ籠の包みが、嫌でも目に入ってくる。

「ごめんね。待った？」

百合香が笑顔を向ける。

「う、ううん」

茂人もどうにか笑顔を作った。百合香はちょこんと茂人の隣りに座る。

「……」

しばらく、百合香は黙ったまま膝に乗せた包みを見つめていた。

「あ、あの」

茂人はゴクンと生唾を飲み込み、口を開く。

「し、篠原さんには、男の友達っていうポジションは必要ないのかな？」

「友達？……」

百合香は顔を上げて茂人を見つめる。その少し動揺したような真剣な眼差しに、茂人の心は一瞬たじろぐ。

「も、もし、俺が篠原さんのチョコ受け取れなかったら……その、俺、篠原さんの友達にもなれないのかなあと思ったりして……」

「無理」

百合香は再び目を伏せた。

「私は、男の友達なんて出来ない。友達のままでいることなんか無理なもの……」

「そ、そうか……」

再び沈黙が続く。茂人の頭の上にポツリと雨粒が一つ落ちてきた。頭のでっぺんがひやりとする。

「……それが答え？」

しばらくして、百合香がぽつりと言った。

「え？」

「成川君は私のチョコレート受け取らないっていうこと」

「いや、その、えーと」

百合香が茂人を見て微笑んだ。その笑みが少し寂しげで、茂人は泣きたい気持ちになる。しかし、茂人は百合香のチョコレートを受け取れなかった。

「分かった。この手作りチョコは私が食べるわ。結構時間かけて作ったから、いい出来だったんだけど」

百合香は包みを握りしめる。

「成川君は他の男の人と違って、すごく素直で正直でいい人だなあと思った。一緒にいてとても安心出来たの。でも、仕方ないわね。ありがとう」

百合香は立ち上がった。雨粒がポツリポツリと体に落ちてくる。
「あ、あの、待って」

茂人は鞆の中から包みを取り出し、百合香に差し出した。

「この前話したよね。俺、チョコ作り上手いって。それで、昨日作ってみたんだ。あの、良かったら食べてもらいたくてさ」

百合香が不思議そうな顔を向けた。茂人の心臓は早鐘を打つ。

「べ、別に意味ないから。その、バレンタインとか関係ないし。ただ、俺のチョコ食べてもらいたいだけだからさ。……友達として」

「……ありがとう」

百合香はチョコの入った紙包みを受け取る。

「成川君となら、もしかしたら友達でいられるかもしれないね」

百合香は口元を弛めた。

「彼女と上手くいくといいね。私、応援してるから」

そう言い残し、百合香は去って行った。茂人の体中の力が抜け落ちていく。今にも失神しそうだ。雨足が段々と強くなってきたが、茂人はしばらく茫然としていた。

百合香のチョコを受け取らなかった！ 百合香をふってしまった！ 茂人の頭の中で叫びにも似た声がこだました。

……『彼女』？ 『応援する』？ ふと、茂人は百合香の言葉を

思い出す。あの彼女っていうのは。

「成川さん、濡れますよ！」

体を濡らしていた雨が突然止んだ。見上げると赤い傘が開かれ、
にこにこ笑顔の美子が茂人を見下ろしていた。

第23話 相合い傘とチョコレート

「あの、私も講義終わったので、駅まで一緒に帰りませんか？」

「え？……あ、うん」

いつもと変わらない美子の笑顔。相変わらず目が細くて団子鼻で化粧つ気のない顔。百合香の美人顔を見た後には、余計に見劣りする顔。だけど、茂人は美子の顔を見て、なんとなく安心した。

「あ、傘忘れたんだった」

パラパラと降っていた雨が、本格的に降り始めた。

「私の傘がありますから」

美子が赤い傘をさしのべる。

「俺が持つよ」

茂人は立ち上がると、美子から傘を受け取った。茂人にとって生まれて初めての『相合い傘』だ。少し照れて先に歩き出すと、美子が小走りに駆けてきた。

なんか、相合い傘で歩くのって難しいなあ。歩く速さも合わせなきゃならないし、傘の位置も考えなきゃならないし……。

美子は歩くのも遅く、茂人についていくため早足になる。茂人が自分の方に傘を寄せるため、美子の右半分は雨で濡れた。それでも、ちよこちよこと美子は茂人についてきた。

「成川さん」

しばらく無言で歩き続けた後、美子が突然口を開いた。

「え？ あ、悪い、傘独占してた……」

茂人は慌てて傘を美子の方にかざす。美子のジャケットの右肩には、大きな雨の染みが出来ていた。美子は気にしている様でもなく、フツツと笑った。

「今日はバレンタインですね」

「は？……」

茂人はドキッとして、思わず立ち止まる。

「そ、そうだな」

「成川さんに教えて貰ったようにトリュフを作って、今朝父に供えて来ました」

「そ、そう」

美子は上手く作れたのだろうか？ 茂人は少し不安だった。

「私、成川さんの分も作ったんですよ。成川さんのチョコは父のは違うものを作りました」

美子は鞆の中から袋を取り出す。『にこにこ青果店』のにこにこマークつきの袋だった。美子は茂人を見上げ、恥ずかしそうに微笑んだ。その笑顔を目にした途端、茂人の顔は見る見る赤く染まっていく。

「どうぞ、受け取ってください」

「……あ、ありがとう」

茂人は差し出された店の袋を、カサカサ言わせながら受け取った。
「あの、それと、成川さん、良かったらバイト続けて貰えませんか？」

「え？ バイト？ 母さんの具合もいいんじゃないの？」

「はい、そうなんですが……私、成川さんに家事のこともっと教えてもらいたくて。ダメですか？」

美子は視線を落とす。

「い、嫌じゃないけど……」

美子の笑顔が消えそうになり、茂人は慌てて答えた。

「良かった。それでは、また明日から来て下さいね」

「うん……」

茂人と美子はまた歩き始める。茂人はホッとした。自分の正直な気持ちとして、本当はバイトを辞めたくないんだということを確信する。

「成川さん、その傘使ってください」

駅に着いた時、美子が言った。

「私、駅に着いたら家に電話して弟か妹に迎えに来てもらいますから」

美子はフツと笑い、茂人が返そうとした傘を断った。

「今度、バイトに来られる時返して貰ったらいいです。では、さようなら」

そう言つて、美子は歩いて行こうとする。

「あつ、ちよつと」

茂人は鞆の中からもう一つの袋を取り出した。

「これ、俺が作ったチョコレート」

「え？ 私にもくださるんですか！？」

美子は驚いて、顔がくつつきそうになるくらいチョコレートの袋に顔を近づけた。

「あ、あの、それ、父さん用だから。お供えしてあげろよ……その後、皆で食べたらいいだろ」

「ありがとうございます！ 父もきつと喜びます！」

美子は満面に笑みを浮かべチョコレートを受け取る。そして、ペコリと頭を下げると、そのまま走って行った。

彼奴の手作りチョコじゃあ心配だから……。茂人は美子の赤い傘とスーパールの袋に目をやる。……。しかし、もうちよつと女の子らしいラッピングとかしないのかねえ？ これ、店の袋だろ。ま、そこが彼奴らしいってことか。

茂人はニヤリと笑う。赤い傘は、俺がもう一度美子の店に行くための保険なのかなあ？ 否、口実？ そんなに俺に来て欲しいと思っっているんだ……。な、ことは彼奴はちつとも思っていないんだろうけど。

ドタドタと躓きそうになりながら階段を駆け上がって行く美子。その後姿を眺めながら茂人は微笑んだ。

「ハート、壊れてんじゃん……」

家に帰った茂人は、美子手作りのチョコを眺めて呟く。どうにかハートマークに見えるでこぼこしたチョコは、真つ二つに割れていた。

ハート形のチョコを贈るのはタブーだろ……。ま、見栄えは悪いけど、味だけは良いのかもしれないな。茂人にとって初めて貰う手作りチョコだった。やつぱり嬉しい。

二つに割れたハートをまた小さく割って口に含んでみる。

「……まずっ」

思わず顔が歪む。美子にはみっちり料理を教え込まなきゃいけないと茂人は思う。付き合う付き合い合えないは別として、百合香の手作りチョコを食べたかったと思う茂人だった。

エピソード

インフルエンザから復活した直樹は、俺の初恋の相手が美子だと知ってかなり驚いていた。直樹はずっと俺が恋しているのは百合香だと思っていたからな……。今も百合香のこと嫌いじゃない。バレンタインデイの後、百合香とは何となく気まずくてあまり口を聞いてないけれど、百合香と友達になれたらいいなと思ったりする。

男の女の友情っていうのが成立するかどうかわからない。少し時間がかかるかもしれない。相手を振るのって思ってたより辛い。振るなら振られる方がまだましなような気がした。……。あれ？俺って今まで振られたことあったっけ？ なんだかそこまでの付き合いさええたことがなかったような気がする。

俺が百合香を振ったことは、しばらくキャンパス内でも話題になっていた。百合香を初めて振った相手が俺だったってことに、皆ものすごく驚いていた。何故だ？……。

美子とは友達以上恋人未満の関係だ。最近は直樹と美子と学食で食べたり、一緒に遊びに行ったりしている。俺と美子が恋人にならないのは、直樹がいつもくっついていいるからかもしれない……。けど、まだいいんだ当分は三人で。

美子は相変わらず家事が苦手でドジばかりしている。一度、化粧すれば？と言ったことがあるが、あの不器用さのことを考えるとしない方がいいのかもしれない。美子はいつも自然体でいいんだ。あの最大の武器である、にこにこ笑顔は、今も俺のハートをくぎ付けにしている。

イケメンな俺と美子は、ベストカップルに違いない！

『性格は普通で、顔が良い子と悪い子どっちを選ぶ？』なんて質問は全く無意味だと気付いた。顔の良い悪いの判断基準なんかない。世間一般の評判なんてのも関係ない。

大事なのは自分の心。美子の顔は俺のナンバーワンなんだ。ミス・

ユニバースと比べたとしても、俺は美子を選ぶ。俺にとって美子は世界一の美女の上をいく存在だから……。

エピローグ（後書き）

無事完結しました！最後まで読んで下さった皆さん、ありがとうございました！

小説のネタを提供していただいた京亨さん、どうもありがとうございました。不細工な顔の女の子の設定は初めてでしたが、色々勉強になりました。顔っていうのは心の鏡だと思うので、どんなに美しく飾っていても心が醜いと顔も醜くなるのだと思います。一見不細工に見えたとしても、その内面が顔に表れ魅力的に見えるような気がします。

心が美しく輝いていると、顔も美しく輝くものなんだなあと感じました。そういう美人になりたいものですね（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400a/>

バレンタインに心を込めて

2010年10月8日12時32分発行